

終戦70年—慰霊を考える 加東市内の忠魂碑・慰霊塔

- ◆県議会本会議等での 慰霊関係の質問と答弁 より
- ◆議員活動ブログ「百聞百見」より
- ◆郷土史ブログ「ふるさと加東の歴史再発見」より

若人の広場、のじぎくの塔、島守の塔、忠魂碑、戦没者公葬



兵庫県議会議員

藤 本 百 男

終戦70年—慰霊を考える 加東市内の忠魂碑・慰霊塔

- ◆県議会本会議等での 慰霊関係の質問と答弁 より
- ◆議員活動ブログ「百聞百見」より
- ◆郷土史ブログ「ふるさと加東の歴史再発見」より

若人の広場、のじぎくの塔、島守の塔、忠魂碑、戦没者公葬



兵庫県議会議員

藤本百男

目次

① 議員活動ブログ「百聞百見」より

慰霊関係

全国戦没学徒追悼祭「若人の広場」

沖縄県一のじぎくの塔、島守の塔1

② 県議会本会議・予算決算委員会より

質問から慰霊関係部分と答弁.....17

③ 郷土史ブログ「ふるさと加東の歴史再発見」より

慰霊関係 加東市内の忠魂碑・慰霊塔33

④ 郷土史ブログ「ふるさと加東の歴史再発見」より

慰霊関係 郷土出身兵士の公葬・出迎え55

まえがき

この「県政資料」は、私の議員活動ブログ「百聞百見」、郷土史ブログ「ふるさと加東の歴史再発見」に投稿してきたものの中から、テーマにしたがって、県議会の本会議や委員会などで質問したものを選び、まとめたものです。

第Ⅱ集は、終戦70年の節目にあたり、戦没者の「慰霊」について、これまで県議会での質問、南あわじ市の「若人の広場」での全国戦没学徒追悼祭をはじめ、沖縄県の「のじぎくの塔」、「島守の塔」での慰霊祭に参列したこと、そして、加東市内の忠魂碑・慰霊塔、戦中の郷土出身兵の公葬の記録などをまとめたものです。

終戦70年を期に戦没者の慰霊、忠魂碑などの慰霊施設の維持管理について考えるきっかけになればと思っています。人口減少社会、少子高齢化が進行するなか、郷土の歴史と先人の足跡を知るとともに未来にどう伝えていくかは今の時代を生きるに私たちの課題です。県民、地域の課題解決の資料の一つとして活用していただければ幸いです。

平成27年5月吉日

兵庫県議会議員

藤 本 百 男

「百聞百見」より

慰霊関係 全国戦没学徒追悼祭「若人の広場」
沖縄県一のじぎくの塔、島守の塔

戦没学徒追悼祭—南あわじ「若人の広場」

2008年10月23日



21日（火）朝、南あわじ市の「若人の広場」で行われる第14回全国戦没学徒追悼祭に参列するために淡路島に渡った。空はどこまでも高く澄みわたり、海は白く光っている。明石海峡大橋を渡

り、高速道路を一路南へと走り続け、西淡三原インターで一般道へ。カーナビで調べがつかず駐在所に駆け込む。奥さんに教えてもらった通りに走ると、眼前の山上に天に鋭い切っ先を向けて立つ構造物が見えてきた。南あわじ市阿万大見山である。曲がりくねった山道を車で登っていくと駐車場への入口に着いた。神戸湊川から出た貸し切りバスがすでに到着していた。

階段を上りきると、まるで沖縄の山城のような石組の構造物、施設があり、その向こうにはどこまでも高い空と海が広がっているだけだった。山の下から見えた鋭角の構造物と施設は丹下健三

氏の設計による「追悼の碑」で、戦没学徒を象徴するペン先を表したものであった。

戦没学徒を追悼する会の会長、永田秀一先生（県会議員）から「若人の広場」建設の経緯、その後の運営、追悼祭復活の経緯と意見を聞かせていただいた。30余年以前、私は東京で学生生活を送っていたが、10月21日は学徒出陣の日であり、毎年特別な思いを持って迎えていたことを思い出す。一方、10.21は国際反戦デーでもあった。大学のキャンパスには立看やビラに「反戦」の文字が氾濫し、アジ演説と反戦歌が響いていた。そんなことを思い出しながら追悼祭に参列した。

神道形式による追悼祭では、海上自衛隊徳島航空基地の喇叭隊の吹奏、神楽のほか、仏教者、キリスト者の読経や賛美歌奉唱も行われた。青い空と山の緑、そして海を背景に翻る日章旗がまぶしく、追悼の碑の上空を見上げると一羽の鳥が悠々と旋回していた。

附属の施設は今廃墟のようにになっていた。鹿児島県の知覧、沖縄のひめゆりの塔、東京の靖国神社と同じように、ここ「若人の広場」に来れば、大東亜戦争、そして祖国のために尊い命を捧げられた戦没学徒の御霊のことを学ぶことができる。兵庫県の青少年はこの「若人の広場」で学べるようにしたいと思った。

私たちは戦没学徒の未来という時間をいただいて今を生きている。このことを忘れまいと心に誓った。

南あわじ大見山「若人の広場」で全国戦没学徒追悼祭

2010年10月22日

21日（木）、今にも雨が落ちてきそうな空模様の下、南あわじ市阿万大見山の若人の広場で、第16回全国戦没学徒追悼祭が



執り行われた。

若人の広場は昭和42年（1967）、20万余の戦没学徒の御霊を慰霊する青少年健全育成施設として設置されたもので、戦没学徒の慰霊施設としては全国唯一のものだ。鳴門海峡が見える山の上に学徒の象徴であるペン先を模した塔が聳える。この施設を設計したのは丹下健三氏で、広島の平和資料館とともに氏の平和への願いが込められているという。開園当初は多くの人々が訪れたが、やがて利用者が減少し、平成7年の阪神淡路大震災後は閉鎖されたままになっている。その後、施設に土地を提供していた南あわじ市が同施設を管理する財団から土地の返還を求めているが、ようやく買い戻すことができ、公園の再整備へのスタートラインに着いた。式に出席した長棟淡路県民局長も今後は南あわじ市を支援しながら県として再整備に取り組んでいきたいと述べていた。

私も一昨年の12月議会、今年の9月議会で若人の広場の整備について本会議一般質問で取り上げたが、まずは再整備への動きがスタートしたことを喜ぶたい。戦没学徒の御霊を慰霊するということは、そのいのちを引き継いで生きる者のつとめである。施

設の荒廃した姿をこれ以上放置することはできない。この施設を一日も早く整備し、多くの人がこの地を訪れ、戦没学徒の御霊を慰め、感謝し、独立と平和の実現を誓う時を持つことができるようにしたい。この施設がある兵庫県こそ、南あわじ市とともにその先頭に立っていかなければならない。

「若人よ天と地をつなぐ灯たれ」と刻まれた石盤と、消えたままになっている塔の下の永遠の灯の装置を見ながら、再整備への思い、決意を新たにした。

全国戦没学生追悼祭—若人の広場で

2012年10月22日



21日（日）、南あわじ市大見山の「若人の広場」で全国戦没学徒追悼祭が行われ、参列した。昨年は決算特別委員会で参列できなかった。第1回追悼祭は平成7年12月8日（大東亜戦争終結50周年の年の開戦記念日）に行われ、今回で18回を重ねる。

この若人の広場は、昭和42年（1967）、20万余の戦没学徒の御霊を慰霊する青少年健全育成施設として設置されたもので、戦没学徒の慰霊施設としては全国唯一のものだ。鳴門海峡が見える南あわじ市の大見山の上に学徒の象徴であるペン先を模した塔が聳える。この施設を設計したのは丹下健三氏で、広島の評

和資料館とともに氏の平和への願いが込められているという。開園当初は多くの人が訪れたが、やがて利用者が減少し、平成7年の阪神淡路大震災後は閉鎖されたままになっている。その後、施設に土地を提供していた南あわじ市が同施設を管理する財団から土地の返還を求めていたが、一昨年によく買い戻すことができ、公園の再整備へ向けて、昨年は基礎調査、今年は整備基本計画が打ち出されている。私もこれまで本会議の一般質問や予算特別委員会で若人の広場の整備について取り上げてきたが、再整備への動きが着実に進められていることをまずは喜ぶたい。

戦没学徒の御霊を慰霊するということは、そのいのちを引き継いで生きる者のつとめである。施設の荒廃した姿をこれ以上放置することはできない。この施設を一日も早く整備し、多くの人がこの地を訪れ、戦没学徒の御霊を慰め、感謝し、独立と平和の実現を誓う時を持つことができるようにしたい。この施設がある兵庫県こそ、南あわじ市とともにその先頭に立っていかなければならないという思いは今も変わらない。

追悼祭の間、船の汽笛が何度も聞こえた、

南あわじ「若人の広場」で全国戦没学徒追悼祭

2013年10月22日

21日（月）、深夜、夜空に月と星がまたたいていた。早朝には霧が出て、今日の晴天を約束しているかのようだった。

青空から差す秋の陽光がまぶしい中、一路南あわじ市の阿万大見山の「若人の広場」を目指して走る。今日は学徒出陣70年、第19回全国戦没学徒追悼祭が行われる。「若人の広場」は現在整備工事中のため、石垣下の広場で行われた。これまで県議会の本

1. 議員活動ブログ「百聞百見」より



会議でも「若人の広場」の整備を質してきたこともあり、完成が楽しみだ。

さて、今日は井戸知事も参列。まず永田秀一会長（県議・南あわじ市）により挨拶があり、全

員で国歌を斉唱し、神道形式での追悼祭が始まった。井戸知事らが追悼の言葉を捧げ、海上自衛隊喇叭隊（徳島教育航空群徳島航空基地隊）によって「国の鎮め」「悲しみの譜」「水漬く屍」が吹奏された。続いて、山口県の巫女さんにより神楽「みたま鎮めの二人舞」が奉奏された。神道形式の神事ではあるが、宗教を超越し、仏教徒の皆さんによる般若心経の読経、キリスト教の皆さんによる賛美歌「海ゆかば」「わがやまとのくに」が奉唱された。参列者が玉串を奉奠し神事が滞りなく終わった。

27年の3月には整備が完成する予定と聞いた。来年は無理かもしれないが、整備完成した広場で戦没学徒の御霊の慰霊を行いたい。そして、ぜひとも県内外から児童生徒がこの施設を訪れ、国のため命を捧げて戦った若人、先人に感謝し、しっかりと生きていくことを決意する場としたい。

戦没学徒追悼祭

2014年10月22日



21日（火）、今朝も道路が濡れていた。夜の間に雨が降ったようだ。ラジオ体操、登校見守りに立ってから、東条グラウンドへ。第9回東条コスモス杯ゲートボール大会が開催された。案じられた空模様も次第に回復。県下各地から参加したチームで盛大に行われた。挨拶では、東条特産山田錦の宣伝と東条川疏水ネットワーク博物館の取り組みについても紹介した。

始球式が終わってすぐに南あわじ市へ向かった。第20回全国戦没学徒追悼祭に参列した。昭和18年10月21日、出陣学徒の壮行会が神宮外苑競技場で挙行されたことに因み、学業半ばで出陣し戦陣に散華した約20万の戦没学徒を追悼する施設がこの「若人の広場」。去年と今年は「若人の広場」が整備工事中のため、場所を変えて行われたが、今年は大見山を仰ぐ海辺の広場に会場が設けられた。追悼する会の会長は永田秀一県会議員（南あわじ市選出）。神道青年全国協議会の青年神職の奉仕により式が進められ、仏教、キリスト教関係者も追悼の祈りを捧げた。井戸知事の追悼の言葉を淡路県民局長が代読し、参列者が玉串を奉奠した。

海上自衛隊徳島教育航空群徳島航空基地隊の喇叭隊の吹奏が行

われ、若人の広場のシンボルに届けとばかりに鳴り響いた。また、靖国神社の巫女により神楽が奉納された。

沖縄県―「のじぎくの塔」、「島守の塔」で慰霊 社会援護活動調査

2012年10月31日



10月29、30日の両日、沖縄県を訪問し、のじぎくの塔と島守の塔で行われた慰霊祭に参列するとともに、沖縄県における社会援護活動の調査を行った。今年は、兵庫県と沖縄県の

友愛提携40周年の節目の年にあたり、のじぎくの塔では井戸知事、藤原議長らにより記念植樹も行われた。

29日、沖縄県遺族会、島守の会の活動調査では、両会の代表から設立の経緯、活動状況などについて説明を受けたのち意見交換を行った。遺族会では、一年を通じて慰霊塔の清掃や遺骨収集活動、慰霊祭への参列など手厚い供養を行って来られたが、なかでも、7月31日の旧盆には、摩文仁の丘に立つ各都道府県の戦没者慰霊塔をはじめ島内各地にある慰霊塔全部を会員が3グル

ープに分かれて清掃活動を実施しておられるということだったが、兵庫県戦没者を祀るのじぎくの塔もお世話になっており、会員の高齢化が進む中、真夏の作業の大変さを思うとただただ感謝の思いだった。

島守の会は兵庫県出身の島田叡（あきら）沖縄県知事と戦没沖縄県職員469人を慰霊する島守の塔の維持管理や慰霊祭に取り組んできた。7月に訪れた際に島田知事等が執務した県庁壕の調査でもお世話になった。現在では若い会員も入会できるように規則改正を行い活動を続けているということだった。

30日、沖縄県福祉保健部福祉・援護課と沖縄県平和祈念財団の取り組みについての調査を行った。福祉援護課からは、戦没者遺骨収集センターの活動、戦没者の慰霊塔の管理調査の現状などの取り組みについて説明を受けた。島内には管理ができなくなっている慰霊塔や碑が増えておりその対策に取り組みつづけているということだった。平和祈念財団の説明を受けたあと公園内の施設等の見学を行った。公園内は修学旅行の高校生の団体で混んでいた。平和の礎や資料館の見学が主で、すぐ近くにあるのじぎくの塔や島守の塔へは足をのばさない。ぜひ、見学コースに入れてほしいと思った。

明治天皇を仰ぐ—沖縄県那覇市の波上宮

2012年07月31日

掲載の写真は沖縄県那覇市の波上宮の一の鳥居と境内の明治天皇像である。波上宮は沖縄総鎮守、琉球八社の一つで隣に護国寺もある。自民県議団政調理事会の管外調査で那覇のホテルに宿泊した7月11日の早朝に参拝した。宮は波の上ビーチに面した岩

1. 議員活動ブログ「百聞百見」より



壁の上に鎮座しており、神主さんが帚で境内を掃き清めておられた。驚いたのは、境内の一角に大きな銅像があり、近づいてみると軍服姿の明治天皇像であった。明治百年を記念して建立されたものであるらしく、神主さんのお話では、「明治天皇像があるのが珍しいのですが、覆いもなく雨ざらしでは申し訳ないという声をよく聞く」ということだった。明治百年は昭和43年のこと。建立は昭和45年と刻まれていた。沖縄県民の明治天皇仰慕の気持ちが感じられた。

7月30日は明治天皇崩御の日で、今年でちょうど100年目。その年に沖縄県で明治天皇の銅像にめぐり逢えたことをただの偶然としたくない。西欧列強のアジア侵略の嵐の中で、明治維新、近代国家建設の先頭に立たれた明治天皇。五箇条のご誓文、教育勅語をはじめ十万首に及ぶ御製などを通じて、明治天皇の大御心を知ることができる。今、わが国が、ロシア、中国、韓国によって固有の領土を不法占拠もしくは脅かされている状況や児童虐待、いじめなど家庭や教育の深刻な問題に直面している状況を考えると、この偉大な時代の精神の体現者であった明治天皇の大御心をあらためて学びなおしていかなければならないと思う。

銅像の後ろに二首の御製が掲げられていた。

たらちねの親に仕へてまめなるが人のまことの始なりけり
わが国は神のすゑなり神まつる昔の手ぶりわするなよゆめ

親孝行と神祇の二首だ。

白梅の塔－女子学徒看護隊

2012年08月09日

先月中旬に自民党
県議団政調理事会の
視察で沖縄県を訪れ
た折、白梅の塔に参
拝した。白梅の塔は
沖縄県立第二高等女
学校の女子学徒看護
隊である白梅部隊



(第24師団野戦病院従軍看護婦)の女子生徒らが凄絶な最後を
遂げた国吉の壕（沖縄県南部の糸満市）に建立されている。

ひめゆりの塔のように多くの人が訪れるわけではなく、駐車場も
整備されていないが、特別な思いでその場に降り立った。白梅
部隊のことは、学生時代に読んだ一冊の本で知った。金城和彦著
『嗚呼沖縄戦の学徒隊』（昭和53年6月20日発行、原書房刊）
500頁の分厚い本だ。昭和53年9月13日読了している。そ
の後、中学の社会科教師になり、歴史の授業で沖縄戦での学徒隊
の資料として活用してきた。

白梅の塔に祈りを捧げたあと、そばの壕の中に入った。このような狭い入口の壕の中で乙女等は手当や水汲みなどをしながら激しい米軍戦車の砲撃、火炎放射器の攻撃を受け、最後を遂げたのだと思うと手を合わせてただただ冥福を祈るしかなかった。

翌朝、那覇市内をウォーキングしていて、ふと気づくと松山町にさしかかっていた。中国寺が目にとまったので歩いていくと門は固く閉ざされていた。雨が降ってきたので雨宿りをする場所はないかと、道路の向かいの公園の方を見ると、像のようなものが見えた。近づいてみると、何と白梅の乙女たちの像だった。さてここは？松山公園とある。そして、沖縄県立第二高等女学校跡と書いてあった。ぞくっとするような感覚に包まれ、像から公園の中に入っていった。昨日、白梅の塔を訪れ、その翌朝、導かれるようにこの乙女等の学校跡に連れてこられた。しばらく公園の中を歩いていると雨も上がった。

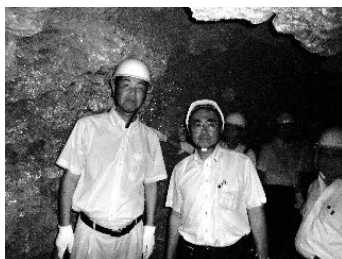
真夏の青い空と白い雲、そして濃い緑を見ると、今でも沖縄でのこの体験を思い出す。

島守の塔、県庁壕―戦前最後の沖縄県知事「島田勲」

2012年08月15日

自民党議員団政調理事会が7月中旬に行った沖縄県の政務調査におけるエピソード、「波上宮境内の明治天皇像」、「白梅の塔と県立第二高等女学校跡地」をこのブログで報告したが、今日は「島守の塔、県庁壕」での体験を報告したい。

「島守の塔」は摩文仁の丘にあり、島田勲沖縄県知事と県庁職員三百余名の戦没者の御霊を祀る碑だ。私たちがこの地を訪れたのは、島田知事がわが兵庫県出身であり、そうした縁で兵庫



県と沖縄県友愛運動県民の会が昭和51年に発足し友愛に基づいた交流が行われて今年は40周年になることや、島田知事の遺骨搜索活動が話題になっていることなどがあつた。島田知事は昭和20年1月沖縄県知事として着任し、米軍の猛攻のなか、県民の命を守ろうと最後までその責任を果たし、6月26日に最期を遂げたとされている。島田知事は、沖縄県民から今も「島守」とよばれて慕われている。

私たちは那覇市真地の高台にある墓地にある県庁壕とよばれる防空壕を訪れた。昭和20年4月に県内の市町村長会議が行われた壕だ。島田知事、荒井警察部長が約3ヶ月この壕内で執務したため県庁壕と呼ばれている。沖縄独特の墓の間の狭い道を行くと、一段低くなつたところに壕の入口があつた。人一人がやっと通れる穴だ。ヘルメット、長靴に履き替えて壕に入る。中は真っ暗で湿気がひどい。しかし、自然の壕内には広い空間もあり、通路となっている穴を行くと、横に掘られた小さな部屋のような空間があつた。その狭い空間に机、ベッドをこしらえて島田知事は約3ヶ月執務し生活したのだった。思わず手を合わせて冥福を祈る。

地元の郷土史家から丁寧な説明をしていただいた。置かれた時代、そして状況が違ふとはいえ、私たちは1時間もその壕内にいることさえできない状況だった。壕から外へ出ると真夏の青い空と白い雲、そしてまぶしい光があった。島田知事の最期の地はわかっていないようだ。その遺骨捜索が行われている。

島守の塔慰霊祭 沖縄県庁で政務調査

2014年10月29日



10月27日（月）、ラジオ体操。今日は健康福祉常任委員会が開かれるので、早めに登庁する。議事課との打ち合わせや梶谷議長から医療介護装具確保推進法に関する資料等をいただいた。

10時30分から委員会開会。閉会中の継続調査事件として「医療確保と健康づくり」を議題とし、「地域医療の確保」及び「疾病対策の推進」について、当局（医務課、疾病対策課）の説明を聞き、質疑を行った。

午後、平成26年度「のじぎくの塔慰霊祭・島守の塔慰霊祭」に出席するため、神戸空港から沖縄県へ向かう。那覇空港から糸満市の摩文仁の丘の平和祈念公園へ直行し、島守の塔慰霊祭に参列した。兵庫県からは金沢副知事をはじめ、兵庫県議会議員（6

名)、神戸市長(代理)、山中健芦屋市長(県市長会長)や兵庫県遺族会関係者ら、また沖縄県からは知事代理、県議会議長代理、遺族会連合会関係者、島守の会関係者らが参列した。

夜、両県遺族会親善交流・懇親会に出席し、挨拶をさせていただいた。島守の会の嘉数昇明氏から島田叡知事に関する新刊本の紹介などもあり、交流が深められた。兵庫県遺族会の中には90歳を超える方も元気に参加しておられた。

28日(火)、午前中は公明党議員団(岸本かずなお議員他3名)と沖縄県庁を訪問し、「経済特区の概要と取り組み」について関係部課からの説明を受けた。県民所得と雇用の向上を課題として、経済特区を活用して国際物流拠点、情報特区、金融特区、企業立地推進などに取り組む沖縄県の現状と展望を知ることができた。古くから中継貿易で栄えた沖縄の立地を生かし、物流と情報で日本とアジアの拠点づくりに取り組む沖縄の元気を感じた。

午後、一人で再び沖縄県庁へ。沖縄県の戦没者遺族等援護対策の取り組みについて、平和援護・男女参画課から説明を受け、意見交換を行った。2年前に沖縄県を訪問した際に同対策について意見交換を行っており、その後の進捗等について聞き、兵庫県に於ける戦没者慰霊塔(碑)の管理に関する問題への対策の参考とするためであった。沖縄県ではその後「あり方検討会」を設け、関係者らの意見を聞きながら積極的に取り組みを進めている。

県庁調査を終え、旧海軍司令部壕(豊見城市)を見学した。大田實海軍司令官(海軍少将)が最後を遂げた壕だ。大田少将の「県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」で結ばれた最後の電文は有名である。戦跡の公園化についても見学の参考となった。この壕のある丘の上には海軍戦没者慰霊塔が建立されている。

午後7時40分那覇発の飛行機で帰神した。帰宅したのは午後10時を回っていた。今回の調査では移動、待時間などに「10万人を超す命を救った沖縄県知事・島田叡」（ポプラ新書）と「沖縄の慰霊塔・碑」（財団法人 沖縄県平和祈念財団）を読んだ。前回訪れた際には島田知事と荒井警察部長らが籠もった壕にも入った。その時のことを思い出しながら一気に読み通した。ぜひご一読を。

ところで、沖縄は28度。みんな半袖のかりゆし姿。子供は半袖半パンで夏姿だった。ただ、風が吹いているので心地良かった。神戸に着いて駐車場へ向かうとき、思わず「おお寒い」とつぶやいてしまった。北海道では雪が降ったという。

県議会本会議・予算決算委員会

質問から慰霊関係部分と答弁



平成20年 12月第297回定例会（第4日12月11日）

—質問— No.3 藤本百男議員

5番目に、若人の広場の整備についてであります。

本年10月21日、私は南あわじ市大見山にある若人の広場を訪れ、第14回全国戦没学徒慰霊祭に参列いたしました。瀬戸内海を見晴らす景勝の地、大見山の丘の上に、学徒の象徴であるペン先を模した記念塔が、青空をバックに天に向かって建っておりました。この施設は、戦没学徒を慰霊する青少年健全育成施設として昭和42年に設置されたものであり、開場当初は修学旅行や各種研修などで多くの利用者があったものの、年とともにその数は減少し続け、加えてこれを運営する財団の経営不振や阪神・淡路大震災

の被害等を受け、現在、施設は閉鎖、荒廃の状況を呈しており痛ましい限りでありました。

「全国戦没学徒を追悼する会」の永田秀一議員から、閉鎖、荒廃に至る経緯、地元南あわじ市、地元有志団体の方々の熱心なる奉仕活動、再開への思い等々説明を受け、灯の消えた丹下健三氏の設計になる、通称わだつみの塔に祈りをささげてまいりました。

古今東西、どの国、どの民族においても、戦争で尊い犠牲となった同胞の慰霊施設は大切に整備をされ、その遺徳を顕彰するとともに、平和への願いや決意を新たにする聖域とされているものであります。我が国においても、そうした慰霊施設は各所に設置されていますが、兵庫県にある全国唯一の戦没学徒慰霊施設がこうした荒廃の状況に置かれていることは、県民の一人として、また戦没学徒の生を引き継いで、戦後の今を生きる者の一人として残念であり、ざんきにたえません。

広場の再開については、地元南あわじ市住民らの努力が続けられており、本県議会においても、永田議員が本年2月議会においても訴えているところでありますが、兵庫県として、この若人の広場の再開、整備を早急に進めることで、学業半ばで尊い命をささげた戦没学徒の慰霊、平和への願いを絶やさず、歴史を風化させない決意を示す必要があると考えるのであります。

淡路島には、震災、環境、自然など幅広い分野の学習や研修を行う施設が整備されており、淡路県民局では環境学習島として、これら自然やエネルギー関連施設を連携した活用が図られているとも聞きます。

若人の広場には、数十年前に国のために命をかけて戦い、倒れた若者の遺品がたくさん展示された資料館が併設されていました

が、これも一日も早く復興することにより、健全な青少年の育成にも役立てたいと考えます。島を訪れる人が、慰霊と平和への願いの時を持つ施設として、若人の広場や資料館を早急に整備できないか、ご所見をお伺いします。

平成20年 12月第297回定例会（第4日12月11日）

—答弁— No.5 知事（井戸敏三）

若人の広場の整備についてのお尋ねがありました。若人の広場は、太平洋戦争で戦没した学徒を慰霊するために、平和の大切さを次代に引き継ぐ貴重な施設であります。南あわじ市、旧南淡町が無償提供した土地に設置されました。大震災以降、利用者が減少し休館状態になったことから、戦没学徒の遺品については展示・保管面を考慮し、平成16年に立命館大学国際平和ミュージアムに寄贈され、平成18年12月には設置運営主体の戦没学徒記念若人の広場財団法人と、動員学徒援護会財団法人につきましては、監督官庁である文部科学省と厚生労働省から設立許可の取り消しがなされております。

今後の施設の利活用に当たっては、抵当権等の債務関係を清算し南あわじ市が土地を取得することが必要であります。県としましても、この土地の返還につきまして助言等の支援を行っています。若人の広場は、淡路地域の多彩な環境学習施設との連携により、特色ある地域づくりの一環としての活用も期待できます。引き続き、南あわじ市の取り組みを支援するとともに、土地取得のめどがつけば、施設の再整備、利活用のあり方について、同市と十分協議し検討を進めてまいる予定でございます。

ともあれ、一日も早く関係機関からの土地の返還を進めたいと、

このようなことで、現在対応しているところでございます。

以上、私からの答弁とさせていただきます。

平成21年 平成20年度決算特別委員会（第9日10月21日）

No.2 藤本百男委員

おはようございます。きょう21日は、昭和18年、文部省主催で東京神宮外苑で出陣学徒壮行会が行われた日である。それから66年目を迎えるきょう、南あわじ市の若人の広場では、全国戦没学徒追悼慰霊祭が行われるが、今日の平和で豊かな日本の礎として散華された学徒のみたまを追悼し、感謝をささげつつ、教育の質問に入りたいと思う。ただ、きょうの質問の内容はこれに直接かわるものではない。

平成22年 9月第306回定例会（第5日10月1日）

—質問— No.3 藤本百男議員

質問の4番目は、「若人の広場」の再整備に向けた支援についてであります。

民主党政権に変わって初めての8月15日。菅首相初め内閣のだれ一人靖国神社へ参拝することはありませんでした。私は、地元加東市社の明治館の敷地にある忠魂碑を訪れ、英霊のみたまに感謝と祈りをささげました。この忠魂碑は、大正15年に建立され、明治10年の西南戦役から大東亜戦争まで、昭和の合併以前の旧社町から出征され戦死された軍人約240柱のご尊名が刻まれており、戦前は帝国在郷軍人会によって祈願祭などが営まれていました。敗戦、そして占領時代を経て、独立講和後の昭和28年、英霊のご尊名を刻んだ石碑を忠魂碑と並べて建立し整備され、今日

に至っているものであります。

このような忠魂碑は、古いもので明治30年代から、多くは大正時代に郡内各地に建立され、遺族会や地区住民によって整備、法要が営まれてきました。占領中は小学校の砂場の砂の下に石碑を埋めて隠し、講和独立が成ってもとの台石の上に碑を建て直したという、そういった苦労話も聞きました。祖国を守るために出征し戦陣に散華された英霊に、今日の平和と繁栄への感謝の祈りをささげる慰霊の象徴が忠魂碑であります。しかしながら、時代の進展とともに移転されたり、遺族会会員の高齢化により維持、管理していくことが困難になりつつあるのが現状であります。

前置きが長くなりましたが、平成の時代に生きる私たちがこうした過去を顧みて、尊い犠牲となられた先人の命を引き継いで生きているということに改めて向き合うことや、戦争だけではなく、自然災害、公務等犠牲となられた人々のことに思いをはせ、教訓を学び、誓いを立てることを通して、過去との命の連続性と未来への責任と使命を共通に自覚する行為、これが慰霊であり、人間としての根幹をなす大切な行為でもあると考えます。

そうしたことを踏まえるとき、昭和42年、淡路島の大見山に建設された戦没学徒記念「若人の広場」は、大東亜戦争中、祖国日本の危急を救うために学業半ばにして学徒出陣された若者だけでなく、工場などで労働に従事された学徒も含め約20万もの命を慰霊し、平和の大切さを次代に引き継ぐ全国唯一の施設であります。この広場のその後の荒廃については、平成20年12月議会において、広場再建に向けての県の対応を質問したところですが、本年5月に南あわじ市が同広場を管理していた財団法人から土地と建物を購入し再整備をめざしているとの報道に接し、多

くの関係者の皆さんのご努力がようやく実を結んだことを我ががことのように喜びました。再整備に向けては、まだまだ多くの課題があるとのことでありますが、手をつけることができなかった事態が解消され、本来の慰霊の場を再び整備できる状況になったことを心の底から喜んでおります。

そこで、先日開催されました淡路の地域づくり懇話会でも、南あわじ市の中田市長が、「観光だけでなく平和を祈る場所として、知恵をかしてほしい」と話されていましたが、兵庫県として、この広場の再整備に向けて、今後どのような支援を想定されているのかご所見をお伺いします。

平成22年 9月第306回定例会（第5日10月1日）

—答弁— No.5 知事（井戸敏三）

まず、若人の広場の再整備に向けた支援についてのお尋ねがありました。

若人の広場は、南あわじ市の努力により、ようやく土地・建物の権利関係の問題が解決しました。これからは具体的にどう広場を整備・活用していくかが検討できる段階となったということです。広場内の施設は、長年放置されてきたため荒廃が激しく、安全確保が必要であります。広場は太平洋を望むすばらしい絶景の地にあり、展望広場、公園として整備することが望ましいと考えます。

また、若人の広場と名づけられた由来である平和について語り合う広場という固有の趣旨や、広島平和記念公園と並ぶ施設としてこの施設の設計を手がけた世界的建築家丹下健三氏の思いや、記念塔とそれに続くアプローチ、展示棟が一体となったデザイン

を大切にしつつ整備方針を検討しなければなりません。展示館にあった遺品は既に立命館大学国際平和ミュージアムに寄贈されており、展示施設としての活用は難しいと考えています。

私たちには、平和について語ることの大切さを後世の人たちに伝えていくべき責務を持っています。そうしたことから、この施設の整備に当たっては、有識者の意見も反映させつつ、南あわじ市とともにしっかりとした整備方針を検討してまいります。

いずれにしても、この施設は戦没学徒の記念という全国的にもまれな施設であり、整備には、市の負担にも限界がありますから、国の支援も受けながら、今後、整備の方向の検討に併せて、市負担額軽減に向けた県としての支援策を検討してまいります。

平成24年 12月第315回定例会（第4日12月11日）

—質問— No.64 藤本百男議員

私は、10月29日、30日の2日にわたり、沖縄県を訪問し、社会援護活動の調査を行いました。30日には、糸満市摩文仁の平和祈念公園内の「のじぎくの塔」で行われた慰霊祭に参列いたしました。「のじぎくの塔」は、兵庫県出身の戦没者3,073柱のみたまを慰霊するために、広く県民からの浄財で昭和39年に建立されたものです。管理は、兵庫県遺族会が行っていますが、毎年7月31日には沖縄県遺族連合会の皆さんによって清掃奉仕が行われています。まことにありがたいことです。

慰霊祭の後、「のじぎくの塔」の碑に刻まれた戦没者名の中に、我が、今は加東市ですが、旧の加東郡、郷土出身兵士の名前を見つけ、祖国日本と沖縄防衛の尊い犠牲になられた英霊のみたまに感謝の誠をささげ冥福を祈りました。

近くの平和公園内の「平和の礎」では、多くの修学旅行生の団体が来ており、その中に兵庫県内の私立高校の一団が兵庫県出身戦没者名の前で親族の名を探す姿が見られました。兵庫県の県立高校、そして公立中学校も沖縄県へ修学旅行を実施していますが、そこから歩いてほんの数分のところにある「のじぎくの塔」を訪れる学校は、まれであると聞きました。

一方で、「のじぎくの塔」に近く、兵庫県出身の沖縄県知事である島田叡氏、また、荒井警察部長を初め、沖縄県職員469柱のみたまを祀った「島守の塔」を訪れる学校も中にはあると聞きました。それは、兵庫版道徳副読本の中学校版に取り上げられている島田知事を資料にして、修学旅行の事前学習をしてきた学校ではないかと推察します。

広島や長崎を修学旅行で訪れる学校は、千羽鶴を折って犠牲者にささげることが普通であります。戦没者への慰霊は、戦後の日本を生きる人間としてのあるべき姿であると考えます。

これまで一般質問等の機会に、南あわじ市大見山にある「若人の広場」の整備を取り上げてきましたが、現在は南あわじ市によって整備計画が進められていると聞いています。全国唯一の戦没学徒の慰霊碑であるこの施設を整備し、県内外の児童生徒が平和を祈念するとともに、戦没学徒のみたまに祈りをささげる場としても、一日も早い整備を祈るばかりであります。

慰霊という行為は、亡くなられたその人の志を継ぎ、その人の分まで生きていくという決意を行うことでもあります。また、戦没者、遭難者、義民義士、郷土の先人、偉人の生き方を学ぶことで、伝統や文化を尊重し、それらを育んできた国や郷土に愛着を持つ人を育成することにつながると考えます。

そこで、沖縄へ修学旅行を実施する県下の学校には「のじぎくの塔」をぜひ訪れ、祈りをささげるとともに、清掃奉仕も体験させてはと考えるがいかがでしょうか。

以上で私の質問を終わります。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

平成24年 12月第315回定例会 (第4日12月11日)

—答弁— No.70 教育長(大西孝)

続きまして、教育の中における慰霊文化の継承についてです。

子供たちがよりよい生き方を学び、考え、自己の生き方のよりどころとするためにも、郷土に対する認識を深めるとともに、郷土を愛し、その発展に努めるよう、地域社会に尽くし、自己の人生を大切に生きた先人への尊敬と感謝の気持ちを育むことは大切です。

議員ご指摘のように、県の中学校道徳教育副読本では、兵庫ゆかりの先人として、戦前最後の沖縄県知事である、兵庫県出身の島田知事を取り上げております。

今年度、修学旅行で沖縄本島を中心に訪れます学校は、中学校で77校、高校が26校であります。沖縄の平和祈念公園を訪れる生徒にとっては、道徳教育副読本の内容を現地で実感できる絶好の機会でもあります。

こうした機会に、実際にのじぎくの塔や島守の塔を訪れ、先人の志や努力に思いをはせ、それに感謝をして、平和の大切さや意味を理解することは、大変有意義であると考えております。

本年は、島田知事の御縁により、きずなを育んできました兵庫・沖縄友愛提携40周年にも当たる年でもあります。この意義につ

きまして、学校関係者に対し、一層の周知に努めてまいります。

今後もさまざまな機会をとらまえながら、学校教育活動全体を通じまして、人間尊重の精神や生命に関する畏敬の念、公共の精神、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、国際社会の平和や発展に貢献する力を育成してまいります。

今後とも、ご指導よろしくお願い申し上げます。

平成24年 健康福祉常任委員会（12月17日）

—質問— No.23 藤本百男委員

① 戦没者慰霊行事について聞く。今年私も参加したのじぎくの塔慰霊祭は、毎年実施しているのか。そうであれば、現地の遺族会が清掃をされているので、清掃も兼ねて実施してはどうか。

② 沖縄には慰霊に関する碑や施設が多いが、その管理や今後の維持に苦慮していた。私たちも同じような問題を抱えており、戦没者慰霊祭を開催しても忠魂碑を管理をしている遺族会や自治体がまちまちであったり、遺族会が高齢化し過ぎて放置されている状況もある。市もそのような状況を把握しているだけで、次の一手がない。今後、そのような状況がさらに増えてくると思うが、県としてはどのように考えているのか。

平成24年 健康福祉常任委員会（12月17日）

—答弁— No.24 社会援護課長（成田貴雄）

① のじぎくの塔慰霊祭は遺族会主催であり、併せて実施している島守の塔慰霊祭は県主催で、毎年実施しており、兵庫・沖縄友愛提携40周年などの記念の年には、参加者を増やして開催し

ている。沖縄の遺族会や地元の人が清掃活動等をしていただいており、ありがたく思っている。こちらは当日の慰霊祭に参加しているだけだが、今年は現地の方との交流を図っており、引き続きその交流は進めていきたい。また、清掃をしてはというご意見をいただいたが、慰霊事業のあり方については、主催する遺族会の意向も踏まえながら検討できればと考える。

② 県内各地に慰霊の施設が多くあるが、自治会や地元の方が所有しており、県が直接的に支援することはなかなか難しい状況である。市町も関係するので、どのようなことができるのかは、遺族会にも各支部があるので、相談、検討できればと考える。

平成26年 12月第325回定例会（第3日12月8日）

—質問— No.3 藤本百男議員

まず、1 番目は、慰霊施設の維持・管理についてであります。

2 年前、私は兵庫県と沖縄県の友好40周年記念の機会に沖縄県を訪問し、沖縄本島南部、糸満市の摩文仁の丘にある沖縄戦の兵庫県関係者の戦没者をまつる「のじぎくの塔」、また、兵庫県出身の戦前の沖縄県最後の知事である島田叡知事と沖縄県職員戦没者をまつった「島守の塔」での慰霊祭に、知事や同僚議員とともに参列し、祈りをささげました。本年も10月に沖縄県を訪問し、島守の塔の慰霊祭に参列し、祈りをささげてまいりました。

沖縄戦最後の激戦地であるこの丘には、国立沖縄戦没者墓苑や平和の礎、各道府県別の戦没者慰霊施設などがあり、まさ



に慰霊の地として、沖縄県を訪れる多くの人々が戦没者のみたまを慰め、鎮める場所となっております。

こうした慰霊のための施設は、戦争に限らず、災害や事故、あるいは、歴史的な合戦などでの犠牲者を慰霊する施設、遺跡として各地に現存しており、中でも私たちにとって身近なものは、戦没者慰霊碑や震災慰霊碑などがあります。

年明けの1.17の「ひょうご安全の日」は、震災から20年の節目を迎えます。年月がたつにつれて震災を知らない世代や人が増え、記憶の風化が心配されております。20年前の震災にして、そうでありますから、いわんや、来年、終戦70周年を迎えるさきの大戦は、風化を超えて遺物化しつつあると言っても過言ではないでしょう。

さきの大戦で亡くなった方々の忠魂碑などの慰霊碑は、我がふるさと加東市社にも立派な忠魂碑があり、明治の西南戦役以降に郷土から出征し戦病死された151柱の英霊のご尊名が刻まれております。

全国の多くの忠魂碑は、戦後70年近くたった今、維持管理を行ってきた遺族会の方々も急速に高齢化が進み、また遺族も遠く故郷を離れ、放置され荒廃しているものも少なくありません。このままでは、風化などというレベルの話ではなく、完全に忘却のかたに置いていかれるのではという危惧を抱かざるを得ません。

忠魂碑の維持管理については、直接行政が行っておりません。建立者、または管理者が行うのが原則と聞いておりますが、維持管理者も管理状況も不明であるものもあると聞いております。管理状況不明のもの以外についても、老朽化が進行しているもの、修繕が必要なものなどを把握しておかなければ、毀損や倒壊等に

よる危険性の懸念も今後高まるのではないのでしょうか。

国や地方公共団体においても、その対策に動き出していると聞いております。沖縄県においては、慰霊碑、慰霊塔のあり方を考えていくために、関係団体や有識者による会議を重ねておられます。こうした忠魂碑・慰霊塔の現状と、人口減少・超高齢社会を迎える中、今後の維持管理のあり方について、県当局の認識をお伺いします。

平成26年 12月第325回定例会（第3日12月8日）

—答弁— No.5 知事（井戸敏三）

まず、慰霊施設の維持・管理についてです。

忠魂碑ですとか慰霊塔などの戦没者慰霊施設は、管理者が軍人会や遺族会などさまざまであります。維持管理については、このような管理者等において行われるべきものとされています。

ご質問にあった沖縄戦における兵庫県出身戦没者を慰霊する「のじぎくの塔」は、昭和39年に県民の浄財等で建立されて以来、毎年、私を含め県関係者の出席のもと、戦没者遺族による慰霊祭を現地で実施しています。塔の維持管理経費につきましても、県が支援をしています。

しかしながら、県内に建立された戦没者慰霊施設の中には、建立後、年月が経過し、老朽化、管理者の高齢化や不明などによりまして管理状態のよくないものがある、これは私も承知しています。

このことから、この6月に、県内各市町の協力を得て慰霊施設の状況を確認いたしました。486基の慰霊施設が設置されておりますが、うち老朽化等が進行しているものは、約50基あることが判明しました。

このような状況を踏まえ、日本遺族会からは、国に対して民間
建立慰霊施設の維持管理の促進等についての要望が出されていま
す。厚生労働省においても、今年度、慰霊施設の管理状況等につ
いての全国調査を行い、今後の国としての対応を検討するとされ
ています。

県としましては、今後、維持管理が不十分な慰霊施設で管理者
が判明しているものについては、必要に応じ、市町を通じて管理
の徹底を依頼してまいります。

併せまして、国に対しましては、前述の検討状況を踏まえて、
維持管理への支援を要望していきます。これらの状況によって、
県としての対応も検討してまいりますので、どうぞよろしくお願い
いたします。

※参考資料（自民党同僚議員の質問から）

◎平成27年 平成27年度予算特別委員会・速報版（第9日 3月11日）

一質問一 No.48 井上英之委員（加古川市選挙区選出）

沖縄には、兵庫県出身者の戦没者3,073名のみたまを慰霊
するために建立された「のじぎくの塔」や兵庫県版の道徳教育副
読本にも取り上げられている兵庫県出身の沖縄県知事、島田叡氏
をはじめ沖縄県職員を慰霊するための「島守の塔」がある。しか
し、沖縄へ行く修学旅行生の多くが「平和祈念公園」には訪問す
るものの、公園内にある「のじぎくの塔」「島守の塔」を訪問す
る学校は少数である。

私は、この二つの塔を訪問することは、兵庫県の子供が沖縄に
修学旅行に行くことの大きな意義につながると考えている。県教
育委員会においても、平成25年には市町教育委員会に対し、沖

縄への修学旅行の際には、「のじぎくの塔」「島守の塔」への訪問を勧める旨を文書で通知されている。

そこで、今後、小学校も中学校も高校も、より多くの学校に修学旅行先として沖縄を選んでいただき、たくさんの子供たちに「のじぎくの塔」「島守の塔」を訪問していただき、兵庫と沖縄との友愛について考える機会を持ってもらいたいと考えているが、当局の見解をお伺いする。

◎平成27年 平成27年度予算特別委員会・速報版（第10日 3月13日）

—答弁— No.31 知事（井戸敏三）

戦後日本を支えてきたのは、この資源のない日本で経済的な発展やこれまでの社会を構築してきていただいた先人の努力によるものである。すなわち人の力であったと考えるべきだと思う。

そのような中で、本年は戦後70年の節目を迎えることになる。ご遺族をはじめ、関係者が高齢化している中で、さきの大戦の記憶を風化させることなく次世代へ継承して、世界の平和と発展に寄与していくことの重要性が高まっているのではないかと思う。

県としては、県内の戦争犠牲者に追悼の誠をささげ、戦争の悲惨な体験を次世代に伝承することにより恒久平和を祈念するため、県主催の戦没者追悼式をこれまで開催してきた。新年度に開催する追悼式典では、平和の大切さを後世に伝えるために、若年世代に多く参列いただけるよう広く県民にも参加を呼び掛けていきたいと考えている。

また、さきの大戦において学徒出陣や学徒勤労のため動員されて戦死した若人のみたまを追悼する全国唯一の慰霊施設である南あわじ市の若人の広場で、全国戦没学徒追悼式典を開催したいと

考えている。

この施設は昭和42年に整備されたが、施設の老朽化や阪神・淡路大震災により大きな被害を受けて荒廃が進んでいた。また、権利関係が複雑であったので、その整理にも時間を要したので、平成25年度から南あわじ市、県が中心となって再整備を行い、明後日に完成することになっている。したがって、この再生された若人の広場で全国戦没学徒追悼式典を開催したいと考えている。

さらに、沖縄戦における兵庫県出身の戦没者や兵庫県出身の故島田叡沖縄県知事をはじめ沖縄県職員を慰霊するのじぎくの塔と島守の塔の慰霊祭を毎年、現地で実施しているが、今年は特に兵庫・沖縄友愛戦後70年記念事業として、沖縄県が新たに島田叡元知事の顕彰碑を建立される。本県からもその除幕式に、私も含めて県民代表団とともに出席したいと考えている。

私たちは、これらの式典等を通じ、戦没者の尊い犠牲の上に今日の平和と繁栄が成り立っていることを深く胸に刻み、戦争の悲惨さと教訓を次世代につなぎ、誰もが安全・安心に暮らせる兵庫、日本、世界を実現していくこと、そのことがみたまに応える道だと信じて、その実現に全力を尽くすことをお誓い申し上げたいと考えている。

「ふるさと加東の歴史再発見」より

慰霊関係 加東市内の忠魂碑・慰霊塔

上東条村の忠魂碑

2009年03月12日

加東市天神を通る県道小野藍本線が西脇三田線と交差する天神北交差点の中国縦貫道ボックスの南側すぐそばの小高い山に應現寺があります。

車を道路脇に止めて、コンクリートの急な坂道を歩いて



のぼると竹藪を抜けたところに應現寺の本堂がありました。さらに脇の小径を登っていくと、小山の上に明るく開けた一角があり、その中央にさらに小高く盛られた区域が一気に目に飛び込んできました。

石の鳥居、そして階段の上には天に向かって屹立する一本の石碑、石碑の前には陸軍の桜のマークが入った茶色に錆びた砲弾が立てられ、石碑の後ろには神社の本殿風の建造物がありました。「ああ、これが上東条村の忠魂碑だ」。東条の古老からだいたいの話を聞いていただけだったので、まるで導かれるように間違わずに辿り着けたことがうれしくなりました。

忠魂碑は写真のように細長い石柱に「忠魂碑」と刻まれています。裏には、大正十二年三月 元帥陸軍大将子爵 川村景明書と刻まれていました。この歴史ブログでは他の地域の忠魂碑も紹介していますが、社町の忠魂碑（現、加東市社の明治館の敷地内）も川村大将の揮毫です。社町の忠魂碑は大正15年の建立ですから、上東条村の碑はそれより3年前に建てられています。川村大将は薩摩出身の陸軍軍人で、日露戦争では鴨緑江軍司令官として奉天会戦などで活躍した人物です。日露戦争後は子爵となり、大正4年には元帥、その後在郷軍人会会長をつとめています。大正時代のはじめには、全国的に忠魂碑建設ブームが起りましたが、川村大将は多くの忠魂碑の揮毫をしています。

鳥居の側に桜の古木が植わっています。もうすぐ桜も満開となるでしょう。その頃にもう一度訪れ、英霊の御魂に祈りを捧げたいと思いました。

米田村の忠魂碑

2009年02月14日

2月11日、加東市上久米の東光寺の大日さんに参詣した折りに寺の東の山の中腹に米田村（現加東市米田地区）の忠魂碑があることを知り案内していただきました。

忠魂碑は昭和7年（1932）の建立で、大きな自然石に「忠魂碑」と刻まれていました。揮



毫は「陸軍大将鈴木莊六書」とあり、予備陸軍大将で昭和6年から12年まで在郷軍人会会長であった鈴木莊録六大将です。

この忠魂碑は地元の方のお話によれば、元は米田小学校（現上久米公民館のある地）の校地内にあったそうですが、米田小学校の新築移転に伴ってこの地に移されたということです。今では、主に上久米の方が維持管理にあたっておられるとのことでした。遺族会の方々も高齢となりこれからの維持管理が心配だと語っておられました。

三草小学校跡の忠魂碑

2009年02月06日

加東市上三草にあるやしろ国際学習塾の敷地の北東の角に忠魂碑が高くそびえています（写真）。碑の正面土台のところに英霊のご尊名を刻んだ銅板が安置されていたので見てみると、約130柱の御名が刻まれていました。最も古いものは明治10年の西南の役でした。今から約130年前、最後の内戦となった西南の役にこの地から出征され戦没された方がおられたということにあらためて驚きました。



近所の方の話では、敗戦から占領期間中は上部の忠魂碑と刻んだ石は傍らに埋められていたそうです。講和独立後に再び土の中から掘り起こされ元の台の上に据えられたということでした。

碑の忠魂碑の字は川村景明陸軍大将の揮毫で、大正15年3月

の建立となっています。社の忠魂碑もこの川村大将の揮毫で、このブログでも紹介しましたが、もう一度川村大将について説明しておきます。川村大将は薩摩出身の陸軍軍人で、日露戦争では鴨緑江軍司令官として奉天会戦などで活躍した人物です。日露戦争後は子爵となり、大正4年には元帥、その後在郷軍人会会長をつとめています。大正時代のはじめには、全国的に忠魂碑建設ブームが起りましたが、川村大将は多くの忠魂碑の揮毫をしています。

加茂村の忠魂碑

2009年04月09日

8日、加東市立滝野東小学校の入学式に出席しました。控室で地元区長さんから加茂村（現加東市曾我、稲尾、多井田、新町、北野、穂積の地区）の忠魂碑が北野の地藏禅寺にあるということを聞き、式が終わってから車を走らせました。

東小学校から国道175号を横切り、稲尾へと向かう緩やかな坂道を少し走ると左手山側に地藏禅寺が見えてきます。道の南側の池に面した駐車場に車を止め、境内を歩いて西隣の墓地に入ると、植木で囲まれた一角があり、ここに加茂村の忠魂碑がありました（写真）。

この忠魂碑は、元は加茂小学校（現、滝野東小学校）の校門を入ったところ、二宮金次郎像のそばにあったものをこの地藏禅寺に移したものだということも聞きました。



大きな自然石に深々と刻まれた「忠魂碑」の文字は本庄繁陸軍大将の揮毫によるものです。建立年は、昭和十年十月。帝国在郷軍人会加茂村分会、加茂村戦友会によって建立されたものです。傍らに英霊の御名を刻んだ石板が2枚立てられていましたが、これらは昭和25年に建立されたものでした。

ところで、揮毫者の本庄繁陸軍大将は兵庫県篠山出身の軍人で、姫路第十師団長、関東軍司令官になり、満州事変の責任者として満州国建国の立役者となった人物です。敗戦直後、GHQから戦犯容疑で出頭命令が出されると敗戦の責任を感じて割腹自決しています。

天を衝く銃の形の忠魂碑

2010年01月27日

前に紹介した旧滝野村役場跡のすぐ北隣に忠魂碑の建っている小高い場所があります。

以前、この下の道路を車で走っている時に多くの人が草刈りをしている姿を目にしたことがあり、何があるのか気に掛かっていた場所でした。

車を止めて石段を上ると、そこは広い円形の広場のようにっており、その奥、正面に天を衝くように一本の長細い石柱のようなものが聳



えていました。そして目に飛び込んできたのがその中心あたりに刻まれた「忠魂」の2字でした。形は変わっていますが、忠魂碑

に間違いありません。立ち止まってよく見ると、石の台座の上に建っているのは“銃”の形に刻まれた石碑でした。初めて見た形の忠魂碑です。しかもその高さに圧倒されました。昭和15年3月竣工と台座背面に刻まれており、少し離れたところに建てられている石碑の碑文には紀元2600年記念として、昭和9年起工、15年竣工とありました。そして、“忠魂”の文字は明治神宮宮司海軍大将有馬良橘の書であることもわかりました。有馬良橘は東郷平八郎の側近で、のちに明治神宮の宮司を務めた軍人です。

すぐ近くの畑で作業をしていた地元の方によれば、占領中はこの忠魂碑を台座から降ろして地中に埋めていたらしく、講和独立後に再び元に戻したということでした。占領時代に忠魂碑を地中に埋めた話はやしろ国際学習塾（旧三草小学校跡）にある上福田村の忠魂碑でも聞いた話でした。

滝野の忠魂碑の碑文

2010年01月28日

昨日紹介した滝野の忠魂碑建立の趣旨を記した碑文が、同じ敷地の少し離れた場所に建てられていました。碑の前に立って刻まれた文字を目で追いながら朗読すると、忠魂碑建立に込められた当時の人々の思いが伝わってきました。



この忠魂碑には日清日露戦争、第一次大戦、そして満州事変、

進行中の支那事変で戦死された郷土出身将兵の御魂がお祀りされており、「其の武勲を永久に讃え」と記されています。忠魂碑建立の趣旨はまさにここにあり、その標が忠魂碑であって、後の時代を生きる私たちが英霊の御魂に感謝の祈りを捧げる場所なのです。

占領が終わり、再び碑を台座の上に設置した当時の人々も、独立回復を機にそうした慰霊の場を再建しようという強い思いがあったのでしょう。それから半世紀以上が経った今、ひっそりと屹立する忠魂碑。その碑文を紹介します。

皇国ハ日清日露ノ兩戦役欧州ノ戦乱満州支那ノ兩事変ヲ経テ今
ヤ東亜ノ盟主トシテ君臨シ世界ニ冠タル地位ヲ確保スルニ至レ
リ 之一ニ上 陛下ノ御稜威ノ然ラシムル所ナリト雖モ亦下幾
多将士ノ捧ゲタル尊キ犠牲ニ外ナラズ今次支那事変ニ於ケル我
国ノ使命ハ実ニ神武天皇ノ御遺業ニモ比スベク八紘一字ノ大理
想ノ本、真ニ東洋永遠ノ平和ヲ希フ新秩序建設ノ為ニハ尚幾多
ノ劳苦ヲ忍ビ一億一心滅私奉公ノ心ナカルベカラズ 此ノ秋ニ
当リ是等将士ノ英魂ヲ祀リ其ノ武勲ヲ永久ニ讃ヘ以テ尽忠報国
ノ精神ヲ作興シ社会教化ニ資セントス 希クハ後昆ノ奮起ヲ望
ム 因ニ本碑ハ昭和九年起工 全十五年即紀元二千六百年ヲ以
テ竣功ス而シテ碑ノ正面忠魂ノ文字ハ明治神宮宮司海軍大将有
馬良橘閣下ノ書ナリ

瀧野戦友会建立の奉公碑

2010年01月31日

この歴史ブログで加東市河高にある銃の形をした忠魂碑を紹介

しましたが、今日は同じ敷地にある奉公碑を紹介します。

忠魂碑の東側に一段高く、自然石の石碑があり、表面には太い字で「奉公碑」と刻まれています。陸軍中将建川美次書、昭和九年三月竣功と刻まれています。建川美次という名前は知っていたのですが、どういう経歴の持ち主かを調べてみると、昭和7年に陸軍中将になっており、



日露戦争で活躍し、のちに山中峯太郎の「敵中横断三百里」のモデルになった軍人とされていました。戦前はそうしたことでよく知られていたのでしょうか。

碑の裏に銅板が埋め込まれており、碑建立の趣旨が記されていました。

日清日露ノ両戦役及び欧州戦争ハ前古未曾有ノ大戦ニシテ皇国ノ興廃此時ニ繫レリ戦勝ノ結果果シテ今日ノ隆運ヲ致セリト雖モ熟々当時ノ国情ヲ回想スレバ寒心ニ堪ヘザルモノアリ而モ克ク寡少ノ兵力ヲ以テ強敵ヲ應懲シ得タルハ一国民ノ自覚ニヨレリ吾等此ノ千歳ノ一時ニ会シ皇軍ニ従フノ光荣ヲ得タリ偃武ノ後相謀リテ記念林ヲ高倉山ニ営ミ聊カ此ノ光荣ニ酬イ併セテ当年ノ意気ヲ偲ブニ資セリ今ヤ国歩多難国民ノ自覚ヲ要スル昔日ニ譲ラズ是時ニ当リ大方ノ人士深ク思フ当時ニ回ラシ共ニ俱ニ奉公ノ大義ヲ尽サンコトヲ欲スルヤ益々切ナル因リテ再び相

謀リテ奉公ノ碑ヲ建テ以テ其ノ意ヲ表ス

昭和九年四月

瀧野戦友会建立

明治40年建立の忠魂碑—高岡地区

2010年05月14日

過日、ある会合の場で、加東市高岡にある忠魂碑のことが話題にのぼり、滝野工業団地から高岡に抜ける道路の東の一段高くなっている所にある墓地のさらに最も高い場所に忠魂碑があることを教えていただきました。地区では丁寧に守っておられるとの由で、市内の忠魂碑を訪ねている私にとってはぜひ一度お参りしなければという思いにかられました。



さっそく、時間をつくって車を走らせ、教えてもらった通りに走ったのですが、一度は見過ごして通り過ぎてしまいました。Uターンして墓地の近くに車を止めて忠魂碑を探すと、確かに墓地の一番高くなっているところに立派な石碑が建てられているのが目に止まりました。

墓石の間を歩いてその下までたどり着くと、階段の下から見上げる位置に大きな石碑が立っています。階段を上ってみると、「忠魂」の文字がはっきりと目に飛び込んできました。忠魂碑です。石碑には、海軍1、陸軍8計9人の英霊の戒名が刻まれていました。

側面には「明治四十年四月建設」の文字が読み取れます。石碑の裏側には、9柱の郷土出身戦病没兵士の履歴が簡潔に記され

ています。生年は明治13、4、5、6年あたりで、没年が明治37年が多く、澳門（マカオ）や旅順などの大陸の地名が出てきます。「旅順港強行・・・」もあり、日露戦争の旅順港封鎖作戦で戦死されたのか、などと思ってしまいました。9柱の英霊の短い生涯を石に刻み、その偉勲を後世に伝えているのがこの碑であるわけです。碑の立っている場から見える村の景色は時代とともに変化してきているでしょうが、英霊の御魂は郷土を見守るようにここに静かに生き続けているのを感じました。

中東条村の忠魂碑

2009年03月12日

加東市新定の記念碑山に中東条村の忠魂碑と日露戦役記念碑があります。県道小野藍本線沿いにある東条診療所の向かい側に山側へと入る小道があり、地藏さんの脇を過ぎ、分か



れ道を右にのぼっていくとさらに小高いところ、きれいに整備された一角にたどりつきます。ここに中東条村の忠魂碑、記念碑がありました。

階段をのぼると、自然石に太々と「忠魂」と刻まれた忠魂碑（昭和27年建立）と石柱に日露戦役記念碑（明治39年建立）と刻まれた2本の碑が建てられています。その碑の間に英霊の御尊名

が刻まれた石板が置かれ、記念碑の脇には日本魂と書かれた碑もありました（古い写真では石碑の上部にある）。その他、勅諭渙発記念の石柱などもあり、この一角が英霊の御魂に静かに祈りを捧げる場にふさわしい厳かな雰囲気には満ちていました。

日露戦役記念碑の裏面には、中東条村から96人が出征され、91人が凱旋されたことが記されていました。日露戦争は明治37年から38年（1904～1905）のことですから、もう100年余り前のことになります。旅順攻略戦、奉天会戦、日本海海戦などの歴史的な激戦の話も遠くなってしまった感もあります。しかし、中東条村から100人に近い人が出征されたことを知り驚きました。

忠魂碑（記念碑も）はこうした日露戦争や近代日本の戦争、歴史と現在の私たちを郷土出身の戦士という身近な具体的存在を通して結びつけてくれるものだと思います。上東条村、中東条村の2つの忠魂碑を訪れ、そうした思いを強く持ちました。

福田の忠魂碑

2013年06月06日

久しぶりに加東市福田地区の第1グラウンドの東の角にある忠魂碑の前で車を止めました。

この忠魂碑は以前にもこの歴史ブログで紹介しましたが、明治二七八役、すなわち日清戦争の戦死病没者の忠魂碑として建てられたもので、後に郡制の廃止に伴って大正11年（1922）に福田村（主に現在の加東市福田地区）に移管されたものです。

大正時代には全国的に忠魂碑建立ブームが起こり、各町村等に忠魂碑が建てられていますが、百年以上前の明治33年（1900）

の建立はその前で、知る限り加東市では最も古い忠魂碑なのではないかと思います。

土台石には、建設委員長に当時の山田加東郡郡長、委員に郡内各村（現在の加東市と小野市域）の村長の名前が刻まれています。郡制時代の歴史を伝える貴重な忠魂碑です。



上滝野―春日丘軍人墓地の皇后陛下歌碑

2009年04月10日

加東市上滝野、五峰山の中腹に春日丘軍人墓地があります。その入口、満開の桜の木のそばに一枚の大きな石碑があり、近寄ってみると、歌が彫られていました。



皇后宮御歌

やすらかに ねむれとぞおもふ 君のため
いのちささげし ますらをのとも

この御歌は香淳皇后（昭和天皇皇后陛下）が昭和12年（1937）、

戦死者にお詠みになった歌で、英霊の御魂を慰める御心を歌われたものです。裏面には、建碑録が彫られており、昭和25年に上滝野部落、遺族会によって郷土守護の願いを込めて建てられたものということが記されていました。

国の危急に対して身命をささげられた英霊の尊い命の上に今の私たちの命と幸せがあるということにあらためて感謝の気持ちでいっぱいになりました。

屋度の殉国英霊の碑

2014年01月09日

加東市屋度の薬師堂のある墓所の入口近くに一段大きく高い石碑があります。屋度から出征し戦死された英霊の碑です。6柱の英霊の御尊名が刻まれました。台石の周囲がコンクリートで固められ白く光っていました。最近整備されたのでしょうか。



碑の裏面には、6柱の英霊の戦死年月日と場所が刻まれました。昭和14年、18年、19年、そして20年の3月、5月、7月でした。戦死の地は北満、台湾沖、ニューブリテン島、ビルマ、ニューギニア、ルソン。そして、年齢は22歳、23歳、24歳、28歳が2人、39歳と刻まれました。

先の大戦には国中の村から町から若者が出征していきました。

大陸に、南海に、島々に散華され遺骨で凱旋されたのです。未だ収集されずに密林で祖国からの迎えを待って居られる遺骨があります。安倍首相は南洋の国々を歴訪し遺骨収集を強化すると述べています。

この殉国英霊碑は昭和26年10月に屋度部落によって建立されています。昭和26年9月にサンフランシスコ講和条約が調印された直後です。まだ占領中でしたが、条約の発効、独立回復を待たずに碑を建立し、郷土から出征し散華した英霊の慰霊、鎮魂をしたのでしょう。瞑目合掌、拝礼しました。

鴨川の忠魂碑—小学校を見下ろす山の上に

2009年04月07日

加東市立鴨川小学校（加東市平木）の体育館の裏に車を止め、すぐ正面の山に入る急な坂道を登っていくと、小学校を見下ろすことができる場所に手づくりのアスレチックコースがあり、その一角に忠魂碑が建っていました。

この忠魂碑は、昭和7年（1932）の建立で、大きな石を組んだ台の上に堂々とした自然石が建てられ、太々とした筆跡で「忠魂碑」と刻まれていました。揮毫は「陸軍大将鈴木莊六書」とあり、予備陸軍大将で昭和6年から12年まで在郷軍人会会長であった鈴木莊録六大将です。以前にこのブログで紹介した



米田村の忠魂碑（加東市上久米東光寺の東）もこの鈴木大将の揮毫で、昭和7年の建立でした。

春休みのためか、アスレチックコースには子どもたちの姿はなく、足下には松葉が茶色の絨毯を敷きつめたようになっています。忠魂碑のすぐ側の木の枝が茂り、石組みには草が生えて、少し寂しい感じでしたが、もう2、3日もすれば校庭の桜も満開になり、子どもたちの賑やかな声が響くことでしょう。

社の忠魂碑

2006年06月24日

社市街地の南端にある「明治館」の敷地に忠魂碑があります。周囲を石の玉垣で囲み、その中に、大きな自然石で組んだ約2・5メートルの台の上にさらに高さ約2メートルの3本の石碑が聳えています。



水平に伸びた松の枝のために正面から見ると、碑が隠れてしまっていますが、中央の忠魂碑は大正15年3月、両側の碑は昭和28年建立と刻まれています。

中央の「忠魂碑」の揮毫は陸軍大将、川村景明とあります。川村大将は薩摩出身の陸軍軍人で、日露戦争では鴨緑江軍司令官として奉天会戦などで活躍した人物です。日露戦争後は子爵となり、

大正4年には元帥、その後在郷軍人会会長をつとめています。大正時代のはじめには、全国的に忠魂碑建設ブームが起りましたが、川村大將は多くの忠魂碑の揮毫をしています。

両側の碑には英霊のご尊名が刻まれています。明治10年の西南戦争から大東亜戦争まで、祖国のために戦って戦陣に散った英霊の数は、240柱余りにのぼっています。ちなみに、各戦役の数は以下の通りです。西南戦役（4）、日清戦争（5）、日露戦争（7）、日独戦役（第一次大戦・2）、満支事変（31）、大東亜戦争（195）。

60年前の社の忠魂碑―社町元郡公会堂広場

2013年08月15日

加東市社の市街地の南端に明治館があります。明治館は旧加東郡公会堂として明治45年に建てられ、加東郡（現加東市、小野市域）の政治、文化の中心として



百年余りの歴史を刻んできました。その明治館の広場の一角に社町（旧社町、今の社小学校区）の忠魂碑があります。

周囲は石の玉垣で囲まれ、その中に、大きな自然石で組んだ台石の上にさらに3本の石碑が聳えるように立っています。中央は忠魂碑、大正15年3月（1926）建立、両側に英霊尊名碑、

昭和28年（1953）建立が立っています。

忠魂碑の揮毫は陸軍大将、川村景明。川村大将は薩摩出身の陸軍軍人で、日露戦争では鴨緑江軍司令官として奉天会戦などで活躍した人物です。日露戦争後は子爵となり、大正4年には元帥、その後在郷軍人会会長をつとめています。大正時代のはじめには、全国的に忠魂碑建設ブームが起りましたが、川村大将は多くの忠魂碑の揮毫をしています。大正15年の9月28日に建立記念式典が盛大に催されています。

両側の英霊尊名碑には、明治10年の西南戦争から大東亜戦争まで、この故郷（旧社町、現社小学校区）から出征し、戦陣に散った英霊のご尊名が刻まれています。その数は、240柱余りにのぼっています。ちなみに、各戦役の数は以下の通りです。西南戦役（4）、日清戦争（5）、日露戦争（7）、日独戦役（第一次大戦・2）、満支事変（31）、大東亜戦争（195）。私の母方の叔父2人の名もあります。

大東亜戦争に負け、連合軍の占領下にあっては各地で忠魂碑を破壊されないように隠して守ったという話を聞いています。占領が終わり独立を回復した後、再び忠魂碑を建てて英霊を御霊を鎮めたのです。英霊尊命碑は昭和28年（1953）に建立されています。建立の記念写真には若き日の父（藤本豊治）の姿も写っています。その写真に写っている若い幹もまだ細い松の木が60年後には太く成長し、枝も伸ばして碑を正面から隠すまでになっていました。

今年の夏、松や周囲のひらどつつじの植え込み、背後のもちの木
の枝などをきれいに剪定し60年前の姿を取り戻しました。

祖国を、ふるさとを、そして家族を守るため、アジアを白人支

配から解放し、独立と繁栄を築くために故郷から出征して戦った英霊の尊い犠牲のおかげで今日の日本の平和と繁栄があることを忘れてはなりません。そして、感謝と同時に皇室の弥栄と、日本の真の独立と繁栄、アジアの平和と繁栄、郷土の繁栄と人々の幸福を実現することが今の私たちの誓いとしなければならないと思うのです。朝のウォーキングではそんな思いを祈りに込めて参拝し、「海行かば」を歌って鎮魂としています。8月15日、68回目の終戦記念日を迎えます。そして、再建されて60年目を迎えました。

68回目の終戦の日―社の忠魂碑

2013年08月16日

8月15日（木）
早朝、いつものようにウォーキングで社の市街地を歩いて、明治館の広場にある忠魂碑に参りました。



昨日のブログで60年前の昭和28年（1953）3月の写真を紹介しましたが、60年後の今の忠魂碑が今日アップしている写真です。松の幹の太さが60年の歳月が過ぎたことを物語っています。背景の風景も今は樹木が繁っていますが、60年前は木が写っていません。

講和条約が結ばれ、独立を回復した翌年に忠魂碑は英霊の尊名を刻んだ新たな碑を建てて整備されたものです。昨日の写真と見比べてみて下さい。

正月3日の雪景色—忠魂碑・明治館

2015年01月04日

3日（土）の朝、昨夜の大雪（いったら雪国の人から笑われるかもしれませんが、当地では滅多にないことなので）で、一面真っ白になりました。



忠魂碑のある明治館の広場まで来ると、東の空の一角が朱色に輝き始めました。忠魂碑はいつもの朝にもまして荘厳な姿を見せていました。写真は雪の忠魂碑です。

家原の英霊碑

2010年10月15日

加東市社の市街地を北の方角へ歩いていくと、大きく下り坂になり、旧国道175号と合流して、家原の赤岸（あかぎし）交差点になります。

この赤岸に観音寺があり、赤穂四十七士の墓碑があることで知られています。

この観音寺に接して南側に墓地があります。この墓地の南端に大



きな石碑があるのですが、それが写真の英霊碑です。

英霊碑の裏には郷土から出征して戦没された軍人の名前が刻まれています。日清戦争1柱、支那事変3柱、大東亜戦争21柱の計25柱です。建立年は見当たりませんが、碑の前の階段の石柱に「昭和二十八年九月建立」と刻まれていました。講和独立の翌年にあらためて整備されたものでしょう。道路から階段を下りた墓地の入口にも石柱が建てられており、そこには大正十年五月建立と刻まれています。今は道路が高くなっていますが、この墓地の面が道路面であったと聞いています。

墓地では、毎年12月14日の義士祭に剣道少年団の試合も行われます。また、春には墓地の桜が見事に咲き誇ります、。そんな墓地の一角に英霊碑があるのです。

木梨神社境内の日露戦役記念碑

2011年04月14日

加東市藤田にある木梨神社の境内、本殿の西側の古木の隣に石碑が立っています。近づいてよく見ると、日露戦役記念碑であることがわかりました。

碑の天辺に弾が置いてあります。地元の人の話では、昔はもっとたくさん並べてあったということです。今は境内にひっそりと立っていますが、国運を賭けた戦争だった日露戦争にこの地域からも出征されたのでしょう。



木梨神社境内の日支事変祈願

2011年04月15日

昨日は加東市藤田の木梨神社境内にある日露戦争の記念碑を紹介しましたが、今日は同じ境内にある「日支事変祈願」碑を紹介します。

日露戦役記念碑の西隣に一本の背の高い石柱、銅板葺の屋根が真新しい祠、そして石板がまとまってある一角があります。石柱には「日支事変祈願」と刻まれています。後ろの石碑には



「日支事変祈願者」の題と木梨15人、下三草4人、藤田12人の名前が刻まれていました。建立は昭和13年1月（1938）とあり、前年の昭和12年に起こった盧溝橋事件を発端に拡大した日本と中国との戦闘、当時は日支事変の戦勝を祈願したんでしょうか。境内にはこうした近代日本の戦争の歴史を伝える記念碑がありました。

出水の薬師堂―殉国の碑

2010年08月23日

加東市出水の入口にあたる場所に薬師堂があります。お堂の正面には軍人の墓が並んでおり、脇に石碑が建てられています。

昭和27年（1952）に建立されたこの「殉国」の碑には、日支事変、大東亜戦争に出征し戦死した郷土出身兵士の英霊を顕

彰するためにこの一角を聖地とするといった碑文が刻まれています。

その石碑の脇に立つ石燈籠は寛永年間に建立されたものでした。江戸時代はじめの頃、三代将軍家光の頃のものです。



昭和27年といえば、日本の占領が終わり独立を回復した年です。その年に郷土出身の英霊を顕彰する碑を建て慰霊をされたのでしょう。それから58年が経ちました。

「ふるさと加東の歴史再発見」より

慰霊関係 郷土出身兵士の公葬・出迎え

昭和8年—郷土出身兵の町葬

2013年03月31日、04月01日、02日、03日、04日連続投稿

昭和8年（1933）、郷土出身兵の戦死に際し、町葬が執行されました。その始終を当時の文書綴から見てみたいと思います。

遺骨が帰還するのは5月10日、そして町葬は13日に執り行われています。5月3日に役場で協議が行われ、出迎え、葬儀の段取りが整えられていきます。

まず、協議会開催通知を紹介します。

昭和八年五月三日

社町長 石井市太郎

社区長 殿

町葬施行ニ関シ協議会ノ件通知

先般山東省甯安ニ於テ名誉ノ戦死セラレタル末永忠男氏ノ遺骨モ近々中ニ帰還スル様其ノ筋ヨリ通牒有之候ニ付ハ茲ニ本人ノ英霊ヲ弔フ為メ町葬相営ミ度又完全ニ終了スルニハ諸士ノ協力援助得度ク存シ候間御多要中ニハ候ヘ共モ左記日時ニ御参集相煩度

此段及御案内申上候也

左記

一、日時場所 五月五日午後一時 社町役場会議室

協議の結果、町葬執行計画が決まりました。遺骨の神戸港到着から社小学校での町葬までの詳細が決められています。

町葬執行ノ件

一、遺骨到着日時 五月十日午前七時三十分頃神戸入港
午前十一時三分神戸駅発午後零時三十七分姫路駅着聯隊葬
午後四時三十分頃姫路発帰還

イ. 神戸ニ迎フル者、町長、兵事主任、遺族二人、町会議員区長
代表 各一人

ロ. 姫路ニ迎フル者、小学校長、分会長、老兵会長、各種団体代
表 各 人

ハ. 一般出迎場所、福田橋鳥居
側（配列図別紙）

小学校生徒、青訓生、各種団
体員、区長、町会議員其他一
般

二、町葬日時

五月十三日午後一時三十分

社小学校々庭ニ於テ執行
午前十一時葬家ニ於テ祭典
執行

午前十一時四十分出棺



午後零時三十分葬場着

イ、葬家ノ祭典参列者 町長、町議、区長、小学校長、分会長、
老兵会長、各種団体代表一人（途中順序ハ別ニ定ム）

ロ、小学校前道路ニ迎フル者、小学校生徒、青訓生、各種団体員
全部、其他一般

ハ、葬儀参列者

1. 郡外、姫路軍部関係者、知事、満蒙皇軍会長、赤十字社兵庫
支部、愛国婦人会兵庫県支部長

2. 郡内、町村長、中等学校長、小学校長、在郷軍人分会長、各
種団体長、各教化団体長、

3. 町内、官衙学校、銀行、会社、代表者、町会議員、区長、寺院、
各種団体員全部、学校生徒全部（四校）、青訓生、其他一般（着
席位置ハ別ニ定ム）（式順別紙ノ通り）

三、埋葬 午後三時三十分頃葬儀終了鳥居墓地ニ埋葬
参列者 出棺ノ時ニ全ジ

四、葬儀委員

委員長 町長ヲ以テ充ツ

委員 町会議員、鳥居区長、小学校長、分会長、老兵会長、
女青年団長、役場吏員

（職務分担ハ別ニ定ム）

五、香柎料ニ関スル件

本町ヨリ弔慰料ヲ贈呈スヘキニヨリ一般ハ之ヲ廃止セラレタキ
コト

但シ特志者ハ此ノ限りニアラズ

団体ノ供花ハ本日取纏メ致シタシ

六、弔辞ニ関スル件

弔辞ハ各団体代表者ニ於テ準備シ置クコト

但シ町外参列者ノ弔辞多数ニ上ルトキハ町内ノ分ハ朗読ヲ廃ス
ルコト

七、号砲

遺骨鳥居出発ノ時、式場到着ノ時、葬儀開始ノ時、式終了ノ時、
煙火ヲ打掲ケテ合図をナス

遺骨出迎の配置図によると、遺骨の進路は、姫路から高岡を経
由し、福田橋（加古川に架かる橋）を渡り、社町貝原へと入ります。
鳥居（兵士の出身村）までの沿道には、社小学校生徒が両側に、
そして、女子青年団、青年団、青訓生、婦人会、消防組員、在郷
軍人、町会区長、各公官衙、鳥居住民が配置され出迎えるよう
になっています。青年訓練生の一部は伝令及び警備員として配置
されています。

ところで遺骨となって無言の凱旋をされた末永忠男さんは社町
鳥居（現加東市鳥居）出身の方です。鳥居地区の80歳代の方の
話によれば、満州事変で戦死され町葬があった、ということをよく
聞いた、ということでした。

次に式順序を紹介します。

故陸軍歩兵伍長末永忠男町葬

式順序

一、一同着席 （午後一時三十分号砲）此ノ間奏楽

一、委員長開式ノ辞

- 一、祓詞奏上
- 一、大麻行事
- 一、副斎主誂詞奏上
- 一、斎主玉串奉献告別詞奏上 此ノ間奏楽
- 一、祭員一同列拝
- 一、仏心教会吊辞読経
- 一、遺族代表玉串奉献 此ノ間奏楽
- 一、委員長玉串奉献吊辞 此ノ間奏楽
- 一、参列者玉串奉献吊辞
- 一、生徒ノ唱歌
- 一、遺族謝辞
- 一、祭員ノ退拝
- 一、委員長閉式ノ辞
- 一、一同礼拝退席

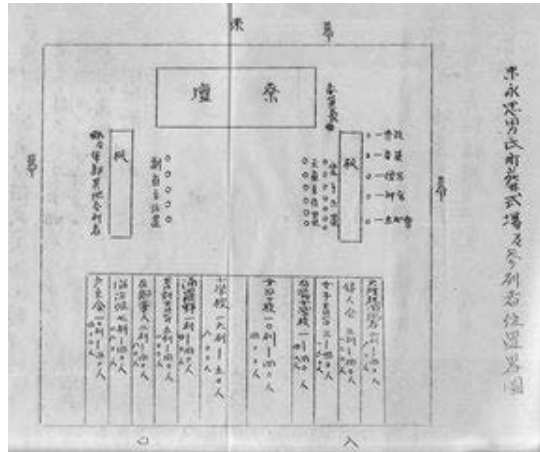
備考 吊辞ヲ供セラル、方ハ受附ヘ申出デラレタシ

この末永忠男さんの名前を忠魂碑（加東市社、明治館前の広場）脇の英霊碑の中に見つけました。満支事変の一番最初にその名が刻まれていました。郷土兵で最初の戦死だったのでは、と思います。次に町葬式場と参列者の配置について紹介します。

式場の正面と左右は幕で仕切られ、式場正面（東）に祭壇が組まれています。

祭壇に向かって右に、委員長席、長机が置かれ、奥から、遺族、委員、僧侶、神官、赤心会席が並んでいます。

机の前に二列で、前列に正斎主、後列に楽手席が6, 7席置かれています。反対の左側には同じく長机が置かれ、県及び軍部その他参列者の席となっています。その机の前には一列で副斎主の席が置かれています。



正面の祭壇に正対（西側入口側）して各種団体参列者の席が設けられています。

右から天理教関係者2列－80人、婦人会3列－120人、女子青年団3列－120人、有隣女学校1列－40人、女学校10列－400人、小学校16列－800人、涌羅野1列－40人、青訓青年5列－200人、在郷軍人2列－80人、消防組7列－280人、戸主会10列－400人となっています。1列は40人で小学校のみ50人になっています。合計すると60列、約2500人という大きな人数になります。

盛大な町葬が執行されたようです。

昭和12年—遺骨出迎えの通知

2012年11月17日

昭和12年（1937）の秋、この年の7月に起きた北支事変で出動し、戦死した郷土兵士の遺骨出迎えに関する通知が当時の

社区事務所の「軍事関係往復文書綴」に綴じられています。遺骨で凱旋する兵士の中に社区の兵の名前はありませんが、駅から各村へと凱旋する沿道に当たるということから、秋の農作業で繁忙の時期であるが、出迎えを、という通知です。「至急」と書かれた通知文は次の通りです。

昭和十二年十一月十五日

社町長 大橋實次

町会議員 殿

区長 殿

各種団体長 殿

学校長 殿

遺骨出迎方ニ関スル件

北支ノ戦線ニ於テ名誉ノ戦死ヲ遂ゲラレシ本郡出身将兵ノ遺骨凱旋セラルルニ付左記ニ依り出迎へ相成度及御依頼候也

追而農繁期ニ候へ共是非参加ヒ下度各沿道（社、鳥居、貝原）ノ各区ハ戸毎ニ弔旗掲揚スル如ク御配慮相煩度希上候

一、遺骨凱旋日時 十一月十七日午後一時（予定ナルニ付多少変更スルヤ知レマセンガ同時刻迄ニ集合セラレ度）

一、遺骨凱旋町村名

加茂、上福田、米田、福田、下東条、上東条、鴨川

一、出迎へ場所 滝野町河高（安取）三叉路西

一、出迎区分

町会議員、区長、在郷軍人会、全部
消防組、青年団、国防婦人会、女子青年団ハ幹部
小学校ハ上級年次（五年生以上）

出迎配置図

郷土兵士一遺骨の凱旋から遺骨出迎え、町葬まで

2009年11月02日～18日 連続投稿

昭和12年（1937）11月、社町長から町会議員、区長、軍事扶助委員宛てに「戦傷死者通報ノ件」が発信されています。この通知から、遺骨出迎え、町葬執行へと続きます。その一連の動きが分かる通知が当時の社区事務所の「軍事関係 往復文書綴」に綴じられています。

当時のことをご存知の方もすでに相当な高齢になっておられるなか、郷土から出征し遠く異郷で戦死された兵士をどのように迎えたのかをこうした一連の文書で記録しておくことが必要だと思います。

今日は、その通知を紹介します。

昭和十二年十一月十九日

社町長

町会議員

区長 殿

軍事扶助委員

戦傷死者通報ノ件

本町内左記勇士十一月八日名誉の戦傷死を遂げられ候由補充隊長より通報に接し候条謹しんでお弔い申上げ候共にお通知申上候

記

山国 宮野治良八 四男

予備役歩兵一等兵（森本部隊） 宮野幸重氏

郷土兵士の戦傷死の通報があったのち、10日ほど経って、遺骨出迎の通知が出されています。社駅での出迎えに関する第一報ですが、時刻が分かっていない段階での通知になっています。

昭和十二年十一月三十日

社町長 大橋實次

各区長殿

各学校長殿

各団体長殿

各団体役員殿

遺骨出迎ニ関スル件

名誉ノ戦傷死ヲ遂ゲラレシ宮野幸重殿ノ遺骨左記ノ通り凱旋遊サル、付別紙計画ニヨリ御出迎へ致度ニ付御部内各位多数御出迎へ被下様御配慮相煩度此段及御依頼候也

記

十二月二日 午前中（時間不足ニ付決定次第速報申上ベキニ付其ノ旨各部内ニ申含メ置キヒ下度）

社駅着列車ニテ

△尚迎へ場整理ノタメ社青年学校生徒二〇名ヲ差出サレ度（前田、光眞指導員指揮）

△在郷軍人会ヨリ遺骨儀仗トシテ四名社駅前差出サレ度（井上副長指揮）

△当日各戸ニ弔旗掲出スル様御指示願度

名誉の戦傷死を遂げた郷土兵士の遺骨凱旋の社駅到着時刻が決まり、出迎えの要領が通知されました。通知には遺骨出迎えの各団体配置図が添付されています。社駅からふるさとの村までの沿道に各種団体が整列して出迎えたのです。

通知は次の通りです。

昭和十二年十二月一日

社町長 大橋實次

官公衙長殿

各町会議員殿

各区長殿

各団体長殿

各在郷軍人班長殿

各青年支部長殿

各国防婦人会支会長殿
各女子青年支部長殿
各消防組小頭殿

遺骨凱旋時刻通牒ノ件

曩ニ御通知申上置候 故宮野幸重殿ノ遺骨左記ノ通り無言ノ凱旋
被遊候条此段御通知申上候也

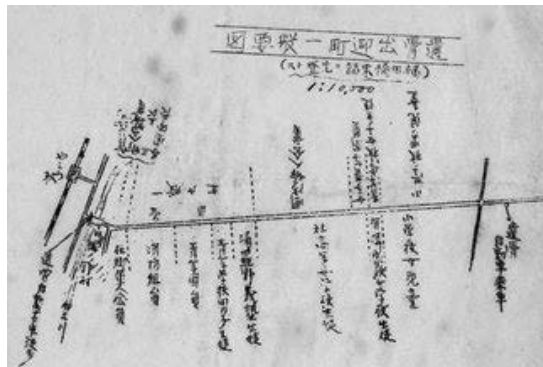
記

十二月二日午前十時（姫路ヨリ自動車）福田橋西詰着予定

この通知に、出迎えの要領を示した地図、配置図が添付されています。

まず、「遺骨の進行順序」は、遺骨の前後を各種団体長等が並んで一団を形成しています。その列は、町長－分会長－分会旗－写真－位牌－在郷軍人会儀仗者4名に囲まれた遺骨－遺家族－官公衙・町議・区長・各種団体長－在郷軍人会の順になっています。

次に「遺骨出迎要図」には、社駅から山国の遺家までの順路概要図が示されています。社駅－福田橋－貝原－鳥居－社－山国という順路になっています。



そして、「遺骨出迎町一般要図」には、沿道の各種団体配置図が示されています。福田橋東詰から貝原と鳥居の中間点辺りまでの間に各種団体が一列横隊に整列して遺骨を出迎えるようになっています。福田橋東詰から順に、官公衙・町会議員・区長・各種団体長がまず出迎え、続いて、在郷軍人会員－消防組員－青年団員－青年学校男子生徒－涌羅野義塾生徒－社高等女学校生徒－有隣家政女学校生徒－小学校女児童が続きます。これらと対面して道路北側には、貝原の戸主・一般－国防婦人会会員－女子青年団員－青年学校女子生徒－小学校男児童という配置になっています。

もう一つ、「山国区民出迎要図」には、兵士の出身地区である山国地区の出迎えの要領が示されています。山国区民の出迎えは、社の三階の四辻から東に一列横隊に整列することになっています。遺骨は社の三階楼の手前で自動車を降り、山国地区の在郷軍人会・消防組・青年団・国防婦人会・女子青年団、山国一般・戸主、小学生男女が整列して出迎えるようになっています。

こうして、遺骨の凱旋出迎えが行われたのです。

遺骨凱旋に続いて、町葬の実施についての通知が出されています。町葬を執行することについて、関係者の協議が行われることになり、その協議会の開催通知が出されています。

昭和十二年十二月二日

社町長 大橋實次

殿

町葬ニ関スル協議会開催ノ件

本日喪ノ凱旋被遊サレ候故宮野幸重殿ノ町葬ニ関シ御協議申上度
ニ付明日三日午後参時社町役場ニ御集合願度御多用中恐縮ニ存シ
候へ共御依頼申上候

前後しますが、遺骨出迎えについての通知文を紹介します。遺
骨凱旋出迎えの通知の前段階の通知が出されていたということ
です。

拝啓 時下寒冷ノ候御貴職愈々御清適奉賀上候

陳者当町山国出身名誉ノ戦傷死ヲ遂ゲラレシ宮野幸重殿ノ遺骨左
記ノ通り凱旋被遊サレ候条此段御通知申上候也

昭和十二年十一月三十日

社町長 大橋實次

殿

記

十二月二日 午前中（時間未定ニ付判明ノ上ハ直チニ御通知申上
候）

社馭着凱旋ノ予定ニ有之候

名誉の戦傷死の通牒、遺骨出迎え、町葬執行協議と続き、遺家
では通夜が行われる段階になり、その参拝について通知が出され

ています。

戦傷死を遂られたのが11月8日、戦傷死者通牒が出されたのが11月19日、遺骨出迎えに関する通知がだされたのが11月30日、そして時刻、配置等詳細が通牒されたのが12月1日、翌12月2日に遺骨が凱旋し出迎えが行われています。同日に出されているのがこの通夜参拝の通知です。

故宮野君遺骨通夜参拝ノ件

社町長 大橋實次

各町会議員殿

各区長殿

各種団体長殿

本日喪ノ凱旋ヲ遊サル、御遺骨ノ通夜参拝日割左記ノ通り決定仕候条当日午後七時遺家霊前ニ参拝相成度御依頼申上候

記

十二月二日 町会議員全部

十二月三日 区長全部

十二月四日 町内各種団体長全部

通夜に続いて町葬が執り行われることになりました。町長から関係者に町葬執行の件について通知が出されています。

戦死からほぼ一ヶ月が過ぎた12月10日、社小学校の校庭で執行されることになった町葬の通知を紹介します。

昭和十二年十二月六日

社町長 大橋實次

区長殿

団体長殿

学校長殿

町葬執行ノ件

十一月八日北支山西省ノ要地榆次附近ノ戦闘ニ於テ斥候兵トシテ
敵情搜索中名誉ノ戦死ヲ遂ゲラレタル山国出身故陸軍歩兵上等兵
宮野幸重君ノ町葬ヲ来ル本月十日午後一時ヨリ本町小学校々庭ニ
於テ執行可仕候条御部内一般へ御伝達相成度此段通知旁々御依頼
申上候也

追記 参列者ハ戸主各戸一人宛参列セシメラレ度

葬儀次第ハ左記ノ通りニ付午前十一時二十分迄ニ（昼食ヲ早クシ）
小学校道路（別紙要図ノ位置）ニ集合スル様御示達ヒ候度願上候

記

- | | |
|------------|--------|
| 一、午前十時 | 葬家開式 |
| 一、午前十一時十五分 | 遺骨葬家出発 |
| 一、正午 | 〃 葬場到着 |
| 一、午後一時 | 公葬開式 |
| 一、午後二時四十分 | 〃 閉式 |

- | | |
|-----------|------|
| 一、午後三時三十分 | 遺骨退場 |
| 一、午後四時三十分 | 埋葬 |

以上

但シ、山国区民、山国区各種団体員、在郷軍人社町分会並ニ青年
学校生徒中儀仗隊要員ハ午前十一時迄ニ山国葬家付近ニ集合セラ
レ度

町葬はどのように行われたのでしょうか。町葬執行に関する通
知に添付されている計画案には、町葬執行について詳細な計画が
書かれています。全部で21項目あります。

町葬執行計画案

一、葬儀委員

委員長 町長

委員 町会議員、区長、小学校長、分会長、軍友会長、消防
組別組頭、国防婦人会長、女子青年団長、助役、農会
長、商工会長、方面委員、青年団長、役場吏員、農会
職員（順序不同）

職務分担別表ノ通り

二、町葬日時

十二月十日午後一時（雨天ノ際ハ公会堂）

葬家開式	午前十時
葬列出発	午前十一時十五分
葬列式場着	正午

公葬儀開式 午後一時
閉式 午後二時四十分

三、会場

社小学校々庭

四、葬儀案内状発送スベキ者

別紙ニヨル

五、会場設備

祭壇其他請負 中東条松沢 石井葬具店

会場案 別紙ノ通り

会場設備手伝要員	山国区	名
	在郷軍人	名
	青学生	名

準備スベキ物件 別紙ノ通り

六、会場内（葬儀当時）要員差出

儀仗兵 社町分会ニ於テ既教育在郷軍人長一兵六名

遺骨葬場到着ト同時ニ立哨遺骨退場迄二名ツツ三十分交代
ニテ服務

服装ハ軍服巻脚絆トシ三八式歩兵銃属品全部トス

七、葬家ノ祭典ニ参列スベキモノ

町長、町会議員代表（山国区三議員）、区長代表（山国区長）、
小学校長、分会長、軍友会長（各種団体長代表トシテ）

八、葬家迄出迎ヘルベキモノ

在郷軍人会員

青学生（儀仗隊員トシテ武装セルモノ長以下三十名）二ヶ分
隊編成

山国区各団体員

山国区民

九、遺骨葬家出発時刻順序

別紙ノ通り

一〇、会場入口前沿道ニ出迎ヘルベキモノ

小学校児童、各種団体員、其ノ他一般

葬儀委員

別紙要図ノ通り

一一、会葬者（町内）

全般（戸主ハ一戸一名宛出席ノコト）

一二、会場内諸要員

会場取締

場内整理 分会員 名 長一名ヲ附ス

場外 “ 消防手 名 小頭ヲ長トシ一名

場内案内

軍部 分会員 名

其ノ他 青年団員 名

接待（国婦員□ヲ指揮ス）

国防婦人会員 名

女子青年団員 名

休憩室準備並取締 小学校職員

休憩室 軍部、長官、待招寺院、遺族親族、町村長官公衛

一般寺院、神職教導職、郡内在郷軍人会、軍友会、一般来客

寺院行 山国区 名（寺院、別紙ノ通り）

一三、町葬執行順序 別紙ノ通り

一四、遺骨葬場出発時刻

午後三時三十分（墓地着午後四時二十分）

一五、遺骨退場ノ奉仕又ハ見送スベキモノ

葬列ハ来場ノ時ト同ジ（別紙ノ通り但シ町長ノ次ニ葬儀委員ヲ加フ）

会場出口前沿道ニテ見送ルベキモノ来場ノ時ト同ジ（別紙要図ノ通り但シ葬儀委員ヲ除ク）

一六、会場取除要員

青年団員	名
在郷軍人	名
青学生	名
山国区民	名

一七、香料ノ件

町軍事後援会ヨリ金五十円弔慰料トシテ贈ルニ付一般香料ハ廃止サレ度

但シ 山国区ノ恒例ニヨルモノ及特志者ハ随意トス

一八、供花ノ件

会場ヲ盛大ナラシムルタメ各団体ヨリ供花一對（低額ノモノ）ヲ御奮発願度御調整願フ様ナレバ町ニ注文方一任セラレ度
◎調整ノ諾否金額ヲ十二月五日迄ニ取纏メタシ

一九、弔辞ノ件

町外ノ弔辞ハ受付ニ於テ郡町村会ノ申合せニヨリ処置ス（朗読又ハ一括奉呈ニ）

町内ノ各種団体ハ弔辞ヲ作製ノ上受付ニ提出ノコト

以上ノ弔辞ハ朗読ヲ拝シ分会長一括奉呈ス

二〇、号砲

左ノ時期ニ煙火ヲ打ち揚げ合図トス

遺骨葬家出発

// 葬場到着

公葬儀開始

// 終了

遺骨斎場退場

二一、労務要員ノ昼食ノ件

葬儀委員名簿を紹介します。町長以下、各種団体長、町会議員、区長、学校長、役場吏員、農会職員などが宛てられています。当時青年団長だった父、藤本豊治の名もありました。

葬儀委員名簿（※役名、職務分担、職名の欄がありますが、職名と氏名が印刷されています）

委員長	大橋實次	町長
委 員	山本重次	助役
//	上月林太郎	分会長
//	神崎福麿	軍友会副長
//	黒石政猪	農会長
//	岸野助十郎	商工会長
//	藤本豊治	青年団長
//	衣笠三之助	消防組副頭
//	神田ムラ	国防婦人会長
//	大橋ひふみ	女子青年団長
//	合田常蔵	小学校長
//	黒石丑吉	方面委員
//	神崎壽景	//
//	井上龍一	青年学校指導員

//	三木徳次	町会議員
//	藤本弥三郎	//
//	内橋重太郎	//
//	松本周次	//
//	石井武夫	//
//	井上恵三	//
//	檜原喜代松	//
//	田中真次	//
//	藤本多一郎	//
//	末廣伴次	//
//	田村喜一郎	//
//	依藤幾太郎	//
//	田村喜一郎	//
//	依藤幾太郎	//
//	神田栄太郎	区 長
//	藤原和三郎	//
//	藤本嘉蔵	//
//	井上真太郎	//
//	黒石徳雄	//
//	吉田新治郎	//
//	藤本辰太郎	//
//	末廣信次	//
//	上月丹治	//
//	中谷幸太郎	//
//	宮田龍蔵	//
//	岸本幸吉	//

//	神戸初太郎	収入役
//	藤本栄三郎	書記
//	依藤金作	//
//	嶋本清一	//
//	上月安治	//
//	末廣正夫	//
//	井本克巳	農会技手
//	藤本忠雄	// 書記

戦死して遺骨で凱旋した郷土兵士の町葬はどのような式順で行われたのでしょうか。町葬執行計画（案）の別紙に示されている町葬の次第を紹介します。

（別紙 一）

故 陸軍歩兵上等兵 宮野幸重君 町葬儀

式順

一、一同着席（午後一時号砲合図）

ラッパ（気ヲ付ケ）吹奏

一同最敬礼

一、挙式ノ辞

一、黙祷（一同起立一分間）

一、管長回向文

一、副導師作法

一、導師作法（一同起立）

一、葬儀委員長祭文（町内一般起立）

一、参列者焼香並弔辞

一、読経（此間焼香）

一、弔歌

一、遺族謝辞

一、閉式ノ辞

町外参列各位退場

遺骨退場

職衆退場

一同退場

△弔辞ヲ供セラルル方ハ受付ヘ申出ラレタシ

町葬執行計画案の「別紙三」に示された、葬列の順序を紹介します。

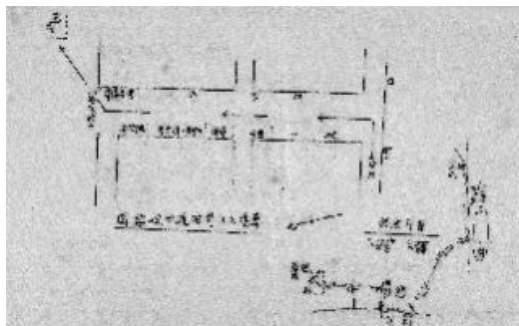
（別紙 三）

葬家ヨリ葬場ニ到ル葬列順序

1. 銘旗 2. 弔旗 3. 山国区青年支部 4. 山国区消防
5. 山国在郷軍人 6. 儀仗隊（青学） 7. 花輪 8. 前火（タイマツ） 9. 燈籠 10. 四本幡 11. 花籠 12. 鶴亀
13. 香爐 14. □花（ハナ） 15. 盛物 16. 奠湯 17. 奠茶
18. 御膳 19. 特招待寺院 20. 副導師 21. 導師 22. 軍服
23. 位牌 24. 写真 25. 儀仗兵 輿 儀仗兵 26. 天蓋
27. 杖 28. 傘 29. 儀仗兵 30. 町長 31. 町議区長各団体長代表 32. 社町分会長 33. 山国婦人団体 34. 山国区其他一般

参列寺院について紹介します。旧社町の寺院のみならず、滝野町、福田村、中東条村の寺院も参列しています。

写真の図は、遺家から葬場の社小学校までの地図です。山国から社へ、本町通りから田町通り、さらに学校道を通して社小学校までのルートが記されています。学校道には、小学生や各団体、一般の町民が整列して葬列を送迎する配置になっています。



参列寺院

一、導師 亀田隆圓僧正

一、副導師 善龍院、持寶院

一、古義真言宗特使 田村快賢僧正

一、特招寺院

山国 妙仙寺 社 圓妙寺 社 法蓮寺 窪田 教
福寺 社 観音寺 タキノ 花蔵院 タキノ 多
聞院 北野 東光寺 上田 教王院 上田 正覚院
南坊 神咒寺

一、会奉行

来住 常楽寺 中東条 東福寺

昭和13年—遺骨凱旋通過の出迎え

2014年07月20日

昭和13年（1938）の年末、郷土出身兵が遺骨となって無

言の凱旋をするため、その出迎えに関する通知が出されています。凱旋するのは隣の上福田村（今の加東市上福田地区）出身兵ですが、社町駅から社町の市街地を通過していくために、その沿道、社町三階楼（現在の加東市社南本町、佐保神社前の交差点）から柏木病院（佐保神社坂下）の県道に沿って各種団体、学校の生徒らに出迎えるよう要請したものです。

今もこの道路は交通量が多く、車や自転車、歩行者が行き交います。三階という地名は若い人には通じないかもしれませんが、76年前にはこの地をこうして無言の凱旋をした郷土兵も少なくなかったのですね。

昭和十三年十二月四日

社 町 役 場

各区長 各官衙長 各学校長 各種団体長 殿

遺骨凱旋ニ付出迎ニ関スル件

明五日午後一時社町通過ノ予定ヲ以テ上福田村戦死者遺骨無言ノ凱旋相成可候条貴部落民貴団体員貴校生徒貴職員ハ社町三階楼前ヨリ柏木病院付近迄御出迎相成様御通達申上候

追而 各戸ニハ国旗ヲ出サシメラレ度申添へ候

昭和19年—町葬執行計画

2008年10月31日

昭和19年（1944）10月13日、社町出身軍人の戦死者

の合同町葬が行われました。その執行計画は次の通りです。

海軍大尉	大橋常孝	
故 海軍々属司政官	小寺義一	君ノ合同町葬執行計画
陸軍兵長	石井 博	

一、日時場所 昭和十九年十月十三日午後一時 於社国民学校

二、葬家参列者 葬家開式ハ

大橋家 午前 九時五十分 十一時二十分

小寺家 // 十一時二十分 出発ハ 十二時トス

石井家 // 十一時二十分 十二時

大橋家 助役、分会長

小寺家 軍友会長、警防団長

石井家 町長、国民学校長

三、諸要員並材料差出

1. 式場設備及材料

イ. 十三日午前八時迄ニ社国民学校ニ左記材料ヲ差出サレ度

縄約一貫目位(出水)三尺杭十本(鳥居)カケヤー鎌一(喜田)

ロ. 国民学校上級生ヲシテ式場設備ニ付協力セラレ度

2. 儀仗兵

葬列儀仗兵トシテ各葬家へ青年学校ヨリ二名宛指名シ当日出発

時迄ニ派遣セラレ度当葬場ノ儀仗モ兼ネラレ度

四、休憩所ノ準備

国民学校ニ於テ夫々御準備セラレ度従前通り

五、葬儀委員分担

町及農業会 町長以下各吏員 全般、受付、庶務、式場係

町会議員 接待（休憩所係）

区 長 受付及場内整理

町 医 救護係

団体（男子） 整理及団体

団体（女子） 接待

各委員ハ正午頃社国民学校ニ参集ノコト（但シ葬家参列者ヲ除ク）

六、寺行別紙ノ通り

七、其ノ他前例ニヨリ行フ

以上の通りです。別紙には寺院名、配役、人足などが記されています。寺院名の欄には、持宝院、教王院、華藏院、善龍院、神咒院、東福寺、円妙寺、教福寺、妙仙寺、観音寺などの名が書かれています。

昭和20年一戦没者公葬について

2013年07月11日

昭和20年（1945）当時の社町社区長の往復文書綴に、戦没者の公葬に関する加東郡北部自治会の取り決めの文書が綴じられています。

この歴史ブログでは、昭和12年の支那事変勃発以来の戦没者公葬に関する資料を紹介してきましたが、当初はきめ細かな実施方法が決められていました。20年のものを見ると、儀仗兵の省略なども決められていたことが分かります。

毎朝のウォーキングでは明治館の前の広場にある旧社町の忠魂碑に参拝しますが、遺族会も高齢、少数となり維持管理も十分で

はなくなっています。

戦没者公葬ニ関スル件

加東郡北部自治会

一、戦没者公報アリタル場合（軍属ヲ含ム）

供物料一柱ニ付金貳拾円也

一、遺骨奉迎ノ件

従前通りトシ儀仗兵ハ省ク

一、葬式ノ件

1. 部落葬トシ経費ハ一切葬家持トス
2. 其ノ際香料トシテ金八拾円ヲ呈ス
3. 町村ノ役職員各種団体ハ必ず参列ノコト
4. 弔詞ハ町村長、分会長、部落会長トス
5. 寺院数ハ普通私葬ニ準ズルコト

一、慰霊祭ノ件

1. 年二回町村費ヲ以テ執行ス
2. 参列寺院ハ英霊ニ関係アル寺院ノミトス
3. 参列遺族数一柱ニ付十名以内トス
4. 慰霊祭ニハ適当ナル祭壇ヲ設ケ位牌、写真ヲ奉祀シ弔旗ヲ掲揚ス
5. 行列ノ往復ハ部落単位トス
6. 慰霊祭ノ参列者及式順ハ従来ノ公葬ニ準ズ

昭和21年―戦死の部落葬

2008年11月01日

戦争が終わってから5ヶ月余りが過ぎた昭和21年（1946）

1月下旬、社区長から各組長に部落葬の知らせが発せられています（写真）。

この知らせは「社区 参考綴」に綴じられていますが、戦時中の葬儀は町葬として行われていましたが、敗戦後はこうして「部落葬」にかえて行われたのでしょうか。

昭和二十一年一月二十三日

社区長

部落葬執行之件

大東亜戦ニ於テ戦死セラレタル社町社中
村数義君ノ英霊ニ対シ明一月二十四日午
後二時部落葬相営ミ可申候間御会葬被下
度御通知申上候

各組長殿



昭和17年 銃後の守り—小国民のふるさとだより 「銃後の便り」—社町銃後奉公会—昭和17年10月

2006年09月20日

昭和17年（1942）に発行された「銃後の便り 十月」社町銃後奉公会の印刷物が手元にあります。大東亜戦争開戦後1年近く経った頃のもので、わら半紙に青インクの謄写版印刷されたもので、B4判の紙を2つ折りして5ページに仕立ててありま

す。小さなガリ版硬筆文字がびっしり書き込まれています。
記事の見出しを拾ってみましょう。

- | | |
|------------|--------------|
| ○感激 | 会長 |
| ○小国民より | 初等科3年男子、6年男子 |
| ○産業組合の概況 | 社信用販売購買利用組合 |
| ○社区銃後団の活動 | |
| ○町の近況 | |
| ・役場日誌ヨリ | |
| ・十月の町常会 | |
| ・今秋靖国神社合祀者 | |
| ・米ノ収穫予想 | |
| ・国民貯蓄表彰 | |
| ・社町ノ人口動態 | |
| ・金属回収 | |
| ・町内伝染病 | |
| ・県立嬉野学徒錬成場 | |
| ・今年徴集ノ現役兵 | |
| ○俳句 | |
| ○団体の動き | |
| ・在郷軍人分会 | |
| ・青年団 | |
| ・社町壮年団 | |
| ・社町農会 | |
| ・社町商工会 | |
| ○国民学校便り | |

○社町授産場

○後記

このうち、「小国民
より」（小学生から兵
隊さんへの便り）を
紹介します。

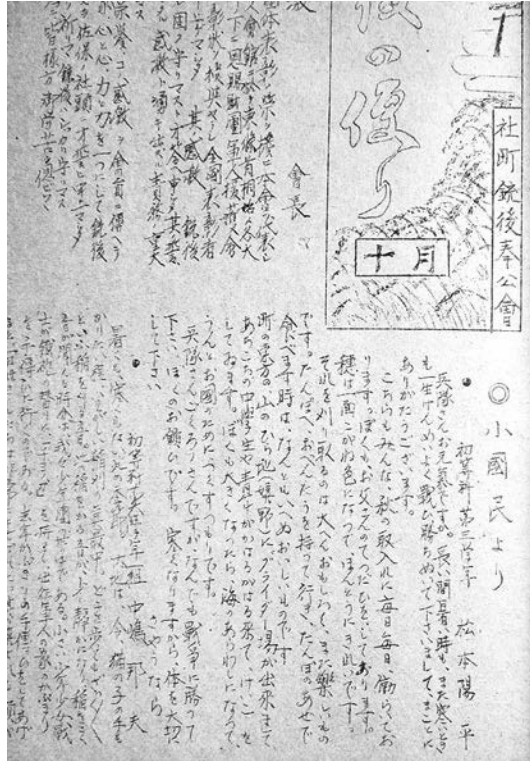
初等科第三学年

松本陽平

兵隊さんお元気で
すか。長い間暑い時
も、また寒いときも
一生けんめい勝ちぬ
いて下さいまして、
まことにありがと
うございます。

こちらもみんな、秋の取りいれに毎日毎日、働いております。
ぼくも、お父さんの手つだひをしております。穂は一面こがね色
になって、ほんとうにきれいです。それを刈り取るのは大へんお
もしろく、また、楽しいものです。たんぼへ、おべんたうを持っ
て行き、たんぼのあぜで食べます時は、なんともいへぬおいしい
ものです。

町の東方の山のひら地（嬉野）にグラライダー場が出来まして、
あちこちの中学生や青年がかはるがはる来てけいこをしています。
ぼくも大きくなったら、海のあらわしになってうんとお国のため



につくすつもりです。

兵隊さんごくろうさんですが、なんでも戦争に勝って下さい。
僕のお願いです。寒くなりますから、体を大切にして下さい。

銃後の便り―(2) 小国民のふるさと便り

2006年09月21日

昨日に続いて、「銃後の便り」に掲載されている「小国民より」と題した小学生から戦地の兵隊さんへの便りを掲載します。

初等科第六学年一組 中嶋邦夫

暑くも寒くもないこの季節。内地は、今、猫の子の手もかりたい程いそがしい稲刈の真最中。どこを歩いてもざっくざっくといふ稲を刈る音。この稲を刈る音が少し静かになり、稲をこく音が聞こえる時分は、我々少年団の世の中である。

小さい少年少女戦士が鉄砲の替りに、「チョノガ」をもって出征兵士の家のかぶきりを手伝ひに行くのである。去年、かぶきりの手伝ひをしてあげると、百姓さんたちは非常に喜ばれた。其の喜ばれる顔が今でもまざまざと僕の心にきざみこまれている。

ある日の朝、新聞がミシンの台の上にのせてあった。新聞を見ていると、父が起きてきて「新聞を持って来なさい」と言われた。だが僕は持って行かなかった。父がもう一度「お前は新聞がきらいじゃないか」「すきだ」「ほ一、何時の間にすきになったのかな」と不思議がられたことをおぼえている。

それはそうだ。此の頃の新聞は我が無敵陸軍がどこを占領したとか、海軍が何々海戦で戦艦や巡洋艦を何隻撃沈したとかいふ痛

快な記事が記してあるからです。此の新聞によって戦線の様子がわかるのである。

戦線はよいが銃後はどうであろうか。我々銃後国民は銃後奉公の誓をよく守り、物を大切にし、進んで貯蓄をし、この国難に勝ち抜ける体をねり鍛へ、戦線も銃後も一致して、ますます日本の国威を全世界へ記しませう。

どうか銃後は御心配なく。御身を大切に。さようなら。

この便り（作文）を書いた中嶋邦夫さんがご健在なら、70歳代半ばに達しておられるはず。稲刈りの頃に小学生がチョノガを持って手の足りない家をまわってかぶきりの奉仕作業をしていたことを知りました。今の子ども達は田圃に行って稲刈りさへすることもほとんどありません。自然体験が不足している子どもたちのためにさまざまな体験イベントが企画され、子ども達はわざわざそこに参加して川遊び、山遊び、そして田圃仕事を体験するようになっています。

時代が違えば子ども達の生活や意識もこんなに違ってしまふのかと思ってしまいますね。

この「銃後の便り」を戦地の兵隊さんはどんな思いで読んだのだろうかと考えながら打ち込みました。最近の若者の中には60余年前に日本がアメリカをはじめイギリスや中国などを相手に戦争をしたことさえ知らない人がいる、ということが報じられています。まして、「銃後」という言葉など知るよしもないかもしれません。



◆著者紹介

藤本百男 ふじもと ひやくお

- 昭和28年10月31日 兵庫県加東郡社町社生（現加東市社）
- 兵庫県立社高等学校、早稲田大学法学部卒業
- （国公立学校教員）兵庫教育大学附属小学校、同附属中学校教諭（社会科）
兵庫県加古川市立小学校、滝野町立滝野東小学校教諭
- 神戸商科大学・兵庫県立大学非常勤講師（兼職）
- 兵庫教育大学大学院修士課程修了（教育学修士）
- 社町史編纂委員
- 平成19年4月 兵庫県議会議員初当選
平成23年4月 同 2回目当選
平成27年4月 同 3回目当選
- 自民党県議団副政調会長(23)、副幹事長(24)、文教部会長(25)
健康福祉常任委員長(26)
- 加東軟式野球协会会长、兵庫県釣針協同組合顧問

県政資料 ふるさと加東の歴史再発見シリーズ II

終戦70年 —慰霊を考える— 加東市内の忠魂碑・慰霊塔

発行日 平成27年5月吉日

著者 兵庫県議会議員 藤本百男

発行所 藤本百男事務所

〒673-1431 兵庫県加東市社1491-1

TEL(0795)43-8270 FAX(0795)27-7221

印刷所 株式会社吉本宝文堂

〒675-1343 兵庫県小野市来住町883-2

TEL(0794)63-4011 FAX(0794)62-5252

非売品